

平安京左京八条三坊三町跡

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京八条三坊三町跡

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたびビル計画に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

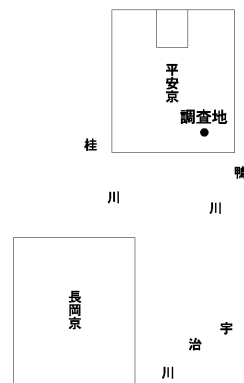
平成17年12月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京八条三坊三町跡
- 2 調査所在地 京都市下京区油小路通塩小路下る東塩小路町地内
- 3 委 託 者 西日本旅客鉄道株式会社 執行役員 京都支社長 福山隆夫
- 4 調査期間 2005年7月28日～2005年9月26日
- 5 調査面積 165m²
- 6 調査担当者 東 洋一・布川豊治
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「島原・五条大橋・梅小路・京都駅」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺 構 番 号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺 物 番 号 挿図の順に通し番号を付した。
- 14 掲 載 写 真 村井伸也・幸明綾子
- 15 遺 物 復 元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 本書作成 4章の一部を布川豊治、6・7章を北野信彦・竜子正彦、その他を東洋一が担当した。
- 18 編集・調整 児玉光世
- 19 本書は、2001年度から発刊してきた『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』を今年度より書名変更したものである。



（調査地点図）

0 2 4km

目 次

1 . 調査経過	1
2 . 位置と環境	4
3 . 遺 構	5
(1) 基本層序	5
(2) 第 1 面	5
(3) 第 2 面	9
(4) 第 3 面	11
(5) 京都駅関連遺構	13
4 . 遺 物	13
(1) 遺物の概要	13
(2) 土器類	14
(3) 鋳造関係遺物	17
(4) 石製品	21
(5) 金属製品	22
(6) その他の遺物	22
5 . ま と め	23
6 . 鏡鋳型と自然堆積層の分析	26
7 . 鏡鋳造関連遺物 蛍光 X 線分析報告	31

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	第 1 面全景 (西から)
		2	土壌94遺物出土状況 (南から)
		3	井戸130遺物出土状況 (北から)
図版 2	遺構	1	土壌94断割 (東から)
		2	井戸130井戸枠 (北から)
図版 3	遺構	1	第 2 面全景 (西から)
		2	L 字状溝116 (北西から)
図版 4	遺構	1	第 3 面全景 (西から)
		2	流路236 (南西から)

- 図版 5 遺物 出土土器
- 図版 6 遺物 出土土器
- 図版 7 遺物 鏡鑄型
- 図版 8 遺物 鑄造関係遺物・石製品

挿 図 目 次

図 1	調査区配置図 (1 : 500)	1
図 2	調査位置図 (1 : 5,000)	2
図 3	調査前風景	5
図 4	作業風景	5
図 5	基本層位図 (1 : 40)	5
図 6	第 1 面遺構平面図 (1 : 100)	6
図 7	第 2 面遺構平面図 (1 : 100)	7
図 8	第 3 面遺構平面図 (1 : 100)	8
図 9	東壁断面図 (1 : 100)	8
図 10	土壇94実測図 (1 : 20)	9
図 11	井戸 5・130実測図 (1 : 20)	10
図 12	L 字状溝116実測図 (1 : 20)	12
図 13	砂礫層出土土器実測図 (1 : 4)	14
図 14	流路236出土土器実測図 (1 : 4)	15
図 15	溝 4・L 字状溝116・土壇94・井戸130出土土器実測図 (1 : 4)	16
図 16	土壇94・井戸130出土鏡鑄型拓影・実測図 (1 : 4)	18
図 17	土壇94・井戸130出土真土模様・粗型裏へラ書拓影 (1 : 2)	18
図 18	土壇94・井戸130出土鑄造関係遺物拓影・実測図 (1 : 4)	20
図 19	石製品実測図 (1 : 2)	21
図 20	滑石製品実測図 (1 : 4)	21
図 21	金属製品拓影・実測図 (1 : 2)	22
図 22	平安時代流路模式図 (1 : 2,500)	23
図 23	鑄造関係遺物出土地点模式図 (1 : 8,000)	24
図 24	分析試料	32

表 目 次

表 1	周辺の調査一覧表	2
表 2	遺構概要表	11
表 3	遺物概要表	14
表 4	土壙94・井戸130出土鑄造関係遺物一覧表	17
表 5	鏡鑄型計測値分布表	19
表 6	胎土分析結果表（真土）	27
表 7	胎土分析結果表（粗型）	28
表 8	胎土分析結果表（土サンプル）	29
表 9	通過粒径頻度分布表	30
表10	通過粒径累積表	30
表11	分析試料一覧表	31
表12	面的な分析 蛍光X線スペクトル	33
表13	点的な分析 試料像・蛍光X線スペクトル	34

平安京左京八条三坊三町

1. 調査経過

調査地は、京都市下京区油小路通塩小路下る東塩小路町で、平安京左京八条三坊三町内の一行六門・二行六門の境界付近に該当する。この八条三坊の中央部は、京都駅新築とそれに伴う再開発に伴って数次にわたる調査が実施されており、ほぼ全域から鎌倉時代から室町時代初頭にかけての町屋を示す遺構や鑄造関係遺物（鏡・銭・刀装具・仏具・埴埴・羽口・銅滓など）が多く検出されている。今回の調査においても、鑄造関係遺構・遺物の検出および該当地の町屋遺構の状況を確認することを主目的とした。

調査は7月28日から重機によって京都駅建設以前まで耕作されていた耕土層を剥ぎ、中世の遺構面を出すことから開始した。その際、調査区北東部で古い京都駅の転車台を検出した。中世の遺構面は柱穴が多く、遺構の重複が激しいので、重複関係の新しい遺構を第1面とし、古い遺構を第2面とした。第1面で14世紀初頭前後の鑄造関係遺物（鏡の鑄型・埴埴・羽口・砥石・銅滓など）が多量に埋まった土壌94と井戸130などを調査した。第2面で13世紀初頭前後の土器類が多量に埋まっていたL字形溝116・井戸5などを調査した。また第3面として、調査区東半部の中世遺構面のベースをなすシルト層を外した面で、流路236を検出した。この流路に堆積したシルト層からは平安時代前期から中期の遺物を検出した。第3面は砂礫・砂層からなり、断ち割り調査で砂礫層から石器や磨滅した古墳時代の須恵器・土師器を検出した。9月20日、トレンチ南壁を一部断ち割って流路236の幅を確認した。21・22両日で埋め戻しを完了した。26日に仮設事務所を撤去し、調査地を引き渡し終了した。

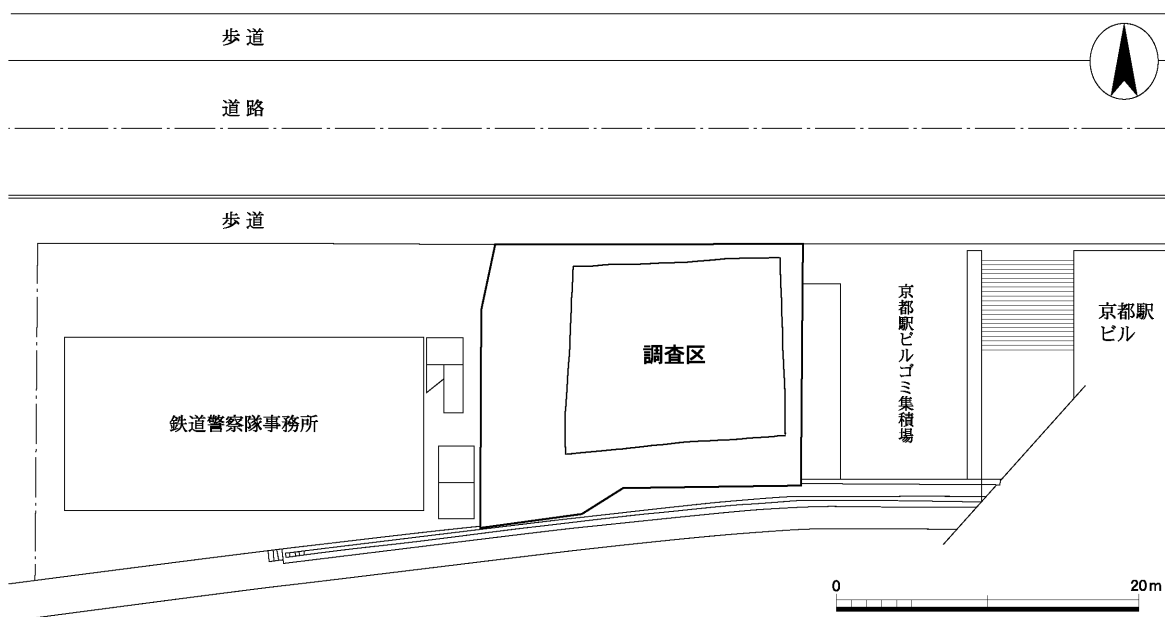


図1 調査区配置図(1:500)

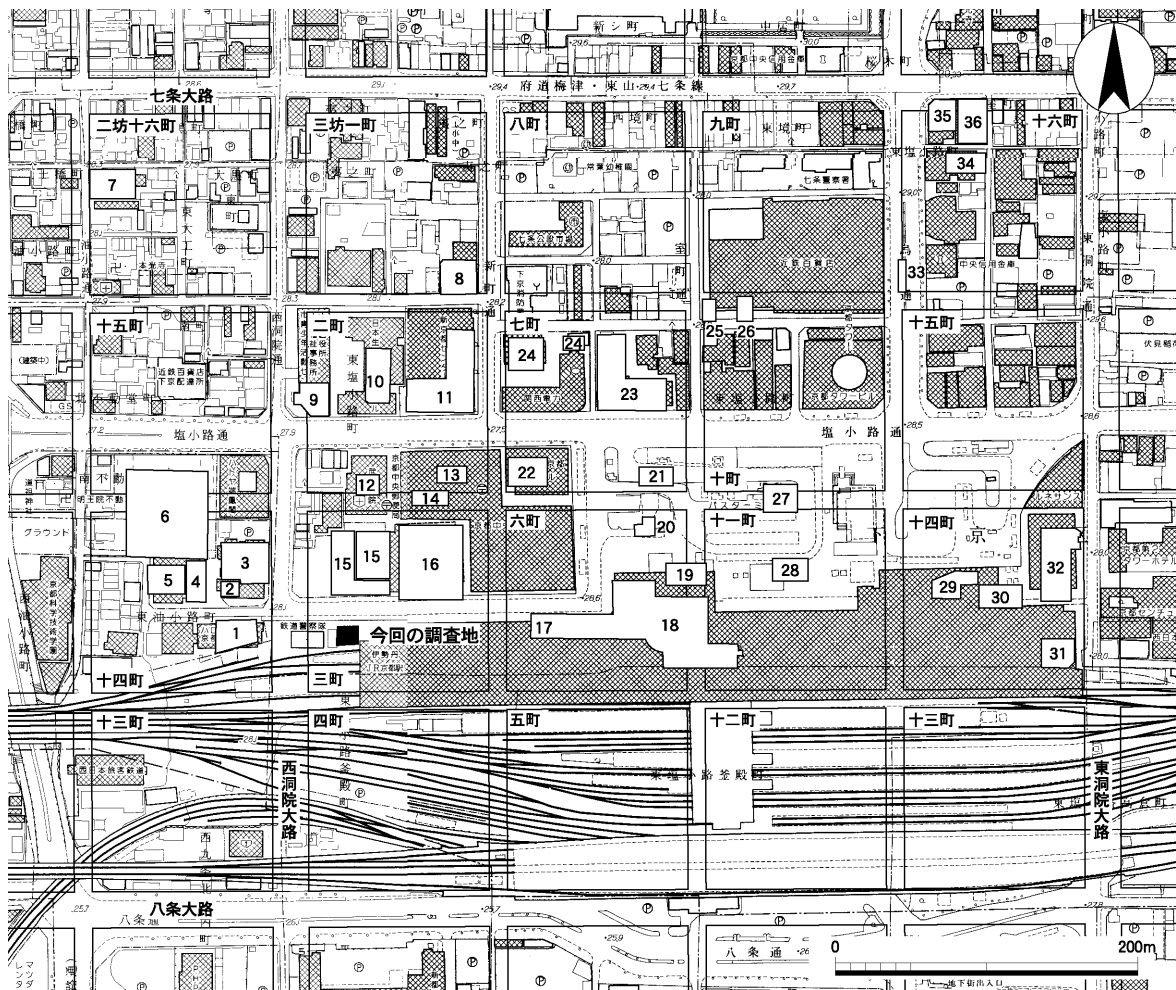


図2 調査位置図(1:5,000) 調査地点の数字は表1の と対応

表1 周辺の調査一覧表

No.	坊・町	調査概要	文献
1	二坊十四町	平安時代前期の溝、平安時代後期～室町時代前半の区画溝・土壇・井戸・柱穴などを検出。鎌倉時代の銅鏡・鏡鍔型・埋甕等が出土。	『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋文研 1997
2	"	平安時代後期の溝、鎌倉～室町時代の土壇・井戸など多数を検出。井戸や土壇などから鏡鍔型、埴塼が出土。	『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋文研 1998
3	"	平安時代前期の池状遺構、平安時代後期の溝、鎌倉時代の木棺墓、鎌倉～室町時代の土壇・井戸・柱穴・柵列などを検出。土壇などから鏡・仏具鍔型・埴塼などが出土。	『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋文研 1998
4	"	平安時代前期の溝・土壇、平安時代後期の溝、鎌倉時代の井戸、室町時代の柱穴・墓を検出。鍔型・埴塼などが出土。	『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋文研 2002
5	"	平安時代後期の建物跡、室町時代前半の木棺墓多数、室町時代前半～中頃の溝・土壇・井戸・柱穴を検出。	『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋文研 1999
6	二坊十四・十五町、八条坊門小路	平安時代後期の溝・井戸、平安時代後期～室町時代初めの八条坊門小路、鎌倉～室町時代の土壇・井戸・柱穴・炉跡などを検出。鎌倉時代後半の刀装具・仏具・鍔型・埴塼・鉾澤などが出土。	『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋文研 1999
7	二坊十六町	平安時代の溝・土壇・井戸・石敷池状遺構、鎌倉～室町時代の土壇・井戸・柱穴を検出。鎌倉～室町時代の土壇から銅製品・埴塼などが出土。	『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋文研 1991
8	三坊一町	古墳～平安時代の流路、平安時代後期の井戸・建物跡、鎌倉時代前半の土壇・焼土・建物跡、鎌倉時代後半～室町時代の土壇・井戸・墓などを検出。焼土から鍔型・埴塼などが出土。	『京都第3タワーホテル新築に伴う埋蔵文化財発掘調査－平安京左京八条三坊跡』(財)京都市埋文研 1978
9	三坊二町	江戸時代の西洞院川を検出。	『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧』(財)京都市埋文研 1981
10	"	平安時代前期～中期の流路(後期に埋めて整地)、平安時代後期～鎌倉時代の溝・土壇・井戸・柱穴・埋甕・墓等を検出。土馬が出土。	『平安京左京八条三坊二町-第2次調査』平安京跡研究調査報告16輯 古代学協会 1985
11	"	平安時代前期～中期の流路(後期に埋めて整地)、平安時代後期～鎌倉時代後半の土壇・井戸・柱穴を検出。平安時代中期～鎌倉時代後期の刀装具・仏具鍔型・埴塼・土馬などが出土	『平安京左京八条三坊二町』平安京跡研究調査報告6輯 古代学協会 1983

No.	坊・町	調査概要	文献
12	三坊二町	詳細不明。	『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧』(財)京都市埋文研 1981
13	"	平安時代後期の八条坊門小路側溝・井戸を検出。	『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-I』(財)京都市埋文研 1978
14	三坊二町、八条坊門小路	詳細不明。	『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧』(財)京都市埋文研 1981
15	三坊三町	平安時代前期～後期の溝・土壌、鎌倉時代～室町時代前半の溝・土壌・井戸・埋蔵土壌群・柱穴などを検出。鎌倉時代～室町時代の土壌・井戸などから鋳型・埴塼などが出土。	『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋文研 1999
16	"	平安時代中期の流路、平安時代後期～鎌倉時代区画溝・土壌・井戸・柱穴など、室町時代の区画溝・土壌・井戸・柱穴・石敷建物遺構などを検出。鎌倉～室町時代の土壌・井戸などから鏡・銭・刀装具・仏像鋳型・埴塼・銅滓などが出土。	『平成6年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋文研 1996
17	三坊六町	鎌倉時代末期～室町時代の区画溝・溝・土壌・多数の井戸・柱穴などを検出。室町時代の土壌から六器や華瓶鋳型・埴塼などが出土。	『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋文研 1996
18	三坊六・十一町、室町小路	平安時代中期～後期の流路・井戸、室町小路、鎌倉～室町時代初めの土壌・井戸・縦穴遺構・建物跡を検出(集落の遺構群か)。鎌倉～室町時代の鏡・銭・刀装具・仏像鋳型・埴塼などが出土。	『平成6年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋文研 1996
19	三坊六町、室町小路	室町小路・東側溝、室町時代の井戸を検出。	『平安京左京八条三坊-京都駅前地下街建設に伴う発掘調査』京都ステーションセンター株式会社・(財)京都市埋文研 1980
20	三坊六町	平安時代後期～室町時代前半の八条坊門小路、鎌倉～室町時代前半の溝・土壌・井戸・柱穴などを検出。鎌倉～室町時代の鏡鋳型・埴塼・銅滓などが出土。	『平成8年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋文研 1998
21	三坊七町	平安時代前期～中期の流路(後期に埋めて整地)、平安時代後期～鎌倉時代の土壌・井戸・柱穴、室町時代の溝・土壌・井戸・柱穴などを検出。鎌倉～室町時代の鏡・銭貨鋳型などが出土。	『平成8年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋文研 1998
22	"	奈良～平安時代中期の井戸など、平安時代後期～鎌倉時代の土壌・井戸など、鎌倉～室町時代の溝(八条坊門小路北側溝か)、室町時代の土壌・井戸・柱穴・鋳造遺構などを検出。	『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋文研 1988
23	"	平安時代前期～中期の流路・土壌・井戸、鎌倉時代前半の溝・土壌・井戸・ピット、鎌倉時代後半～室町時代の溝・土壌・井戸・柱穴・墓・炉跡・建物跡などを検出。鎌倉～室町時代の土壌から銭・仏具鋳型・大量の輸入陶磁器などが出土。	『平安京左京八条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊(財)京都市埋文研 1982
24	"	平安時代中期～後期の土壌・井戸、鎌倉時代の溝・土壌・井戸・柱穴、鎌倉時代後半～室町時代の溝・土壌・井戸・柱穴・石集遺構・埋蔵・銭貨埋納遺構などを検出。土馬、鎌倉～室町時代の遺構から鋳型・鋳滓などが出土。	『平安京左京八条三坊七町』京都文化博物館(仮称)調査研究報告第1集(財)京都文化財団 1988
25	三坊十町、塩小路	平安時代後期～室町時代の塩小路・土壌・井戸・柱穴を検出。平安時代後期～室町時代の遺構から鏡・三鈷杵鋳型・埴塼が出土。	古代文化調査会 未報告・調査位置不明確
27	三坊十・十一町、八条坊門小路	平安時代の八条坊門小路路面・南側溝・北側溝を検出。	『平安京左京八条三坊-京都駅前地下街建設に伴う発掘調査』京都ステーションセンター株式会社・(財)京都市埋文研 1980
28	三坊十一町	詳細不明。井戸(平安時代前期～中期か)。	『平安京左京八条三坊-京都駅前地下街建設に伴う発掘調査』京都ステーションセンター株式会社・(財)京都市埋文研 1980
29	三坊十四町	～平安時代前期の流路(後期に埋めて整地)、平安時代後期の土壌、鎌倉～室町時代前半の溝・土壌・井戸を検出。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』(No.69調査)烏丸線調査会 1982
30	"	平安時代の遺物包含層、鎌倉時代末期～室町時代の溝・柱穴を検出。	『平安京左京八条三坊-京都駅前地下街建設に伴う発掘調査』京都ステーションセンター株式会社・(財)京都市埋文研 1980
31	"	～平安時代中期の湿地(後期に埋めて整地)、鎌倉時代の区画溝・土壌・井戸・柱穴・堅穴状遺構、室町時代の土壌・井戸・柱穴などを検出。鎌倉時代の溝から木製品が多量に出土。	『平成6年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋文研 1996
32	"	～平安時代後期の湿地(後期に埋めて整地)、平安時代後期～鎌倉時代の東洞院大路内溝・区画溝、鎌倉時代後半～室町時代前半の土壌・井戸・柱穴・埋蔵・建物跡を検出。柿経・多量の漆器が出土。	『平成8年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋文研 1998
33	三坊十六町、烏丸小路	平安時代前期～中期の遺物包含層、平安時代後期の土壌・井戸、鎌倉～室町時代前半の溝・土壌・柱穴などを検出。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』(No.74調査)烏丸線調査会 1982
34	三坊十六町	平安時代前期～中期の溝・土壌・井戸・柱穴、鎌倉～室町時代の区画溝・土壌・埋蔵・建物、江戸時代の水路・船着場・土壌・井戸などを検出。	『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋文研 1989
35	三坊十六町、七条大路	平安時代前期～鎌倉時代七条大路・南側溝、平安時代～江戸時代の溝・土壌・井戸・柱穴などを検出。	『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋文研 1994
36	"	古墳時代の流路、平安時代中期～後期の溝・土壌・柱穴、平安時代中期～鎌倉時代の七条大路・南側溝、鎌倉～室町時代の溝・土壌・井戸・柱穴、江戸時代の土壌・井戸・建物基礎などを検出。鎌倉～江戸時代の鋳型・埴塼などが出土。	『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋文研 1994

(財)京都市埋文研：(財)京都市埋蔵文化財研究所

参考文献／鋤柄俊夫「京の鋳物師-七条町と八条院町から-」『都市と職能』中世都市研究会 2001

ト村和直「京都『八条院町』をめぐる諸問題」『研究紀要第8号』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002

2 . 位置と環境

調査地近辺の自然環境は、鴨川扇状地の内、最も新しい塩小路層と呼称されている砂礫層で覆われている。この層には賀茂川・高野川両水系から運ばれた礫を含んでおり、温暖期であった約6000～4000年前に形成されたとされている¹⁾。

平安時代における三町の居住者は一切不明であるが、室町時代に入った永和二年（1376）「大山崎住京新加神人」の「兵衛四郎」が三町の住人であったことが『大山崎離宮八幡宮文書』でわかる。しかし、平安時代末期から鎌倉時代の初めにかけては、三町の北の二町に左右衛門佐藤原公清宅、南の四町には関白藤原忠実の堂舎が、南東の五町には藤原顕隆・顕能親子の八条町尻第二条天皇里内裏 美福門院御所と伝領されてきた平頼盛の池殿があったとされている。さらにその隣は皇室領の大半を伝領した八条女院御所があり、八条大路に南面して西から平清盛の西八条第・平重盛邸・平頼盛邸・平宗盛邸と建ち並び、京の西を固める六波羅と並ぶ平氏権力の中心拠点でもあった。したがって、これらの邸第に挟まれた三町にも権門勢家に関連した建物などが存在した可能性がある。なお鎌倉時代に入って八条女院（障子）亡き後は、八条女院御所跡を中心に八条院町が形成され、八条院領として皇室に伝領されてきたが、正和二年（1313）十二月に後宇多法皇から東寺に施入された時、この三町は含まれていない。

近辺の調査（図2・表1）によって、鎌倉時代から室町時代にかけての鑄造関係の遺構・遺物は八条院町領を越えて広がり、三町以西まで及んでいたことが確認されている。調査地北に位置する七条町では金属を扱う様々な職人などが11世紀末に集住していることが『新猿楽記』などに記述されており、また有名な七条仏所が所在した。平安時代末期から南北朝時代に至るまで金融業の中心地でもあり、借上・土倉・酒屋・傾城屋が七条町に群居していた²⁾。したがって商工業地帯としての七条町が、さらに南に拡大してきたことも考えられる。八条院町が南北朝動乱によって衰退し耕作地に変化していったことが『東寺百合文書』に記録されており、近隣の発掘調査でも14世紀後半から遺構・遺物とも極端に少なくなることが裏付けられている。

註

- 1) 横山卓雄「京都盆地の自然環境」『平安京提要』 角川書店 1994年
- 2) 仲村 研「八条院町の成立と展開」『京都「町」の研究』 法政大学出版局 1975年
「東寺領八条院町の構造と生活」『中世京都文化の周縁』 思文閣出版 1992年
野口 実「京都七条町の中世的展開」『京都文化博物館（仮称）研究紀要第1集』 1988年
臈谷 寿「平安京左京八条三坊周辺の様相」『平安貴族と邸第』 吉川弘文館 2000年 など参照



図3 調査前風景



図4 作業風景

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図5)

拡張区南壁が調査区全体の基本層序を代表するので、それを掲げる。現地表面、標高27.60mから1.65m下がった25.95mまでが旧京都駅の盛土で、その直下に厚さ約0.30mの暗褐色砂泥の耕作土層が調査区全体に廻る。その直下25.65mに中世の遺構成立面をなす地層が水平に堆積するが、調査区東半部と西半部とは地層が異なる。東半部が流路236に堆積した平安時代前期から中期の遺物を含む暗オリーブ褐色の珪砂主体のシルト層で、雲母細片が多量に混じっているのが特徴的である。シルト層の厚さは場所によって異なるが、最も深くなる南壁で約0.45mで、標高25.20mが流路の底である。西半部は砂礫層である。その砂礫層には高野川水系を特定する花崗岩類・脈岩類・ホルンフェルス類の円礫が混入しており、磨滅した古墳時代の遺物を検出している。

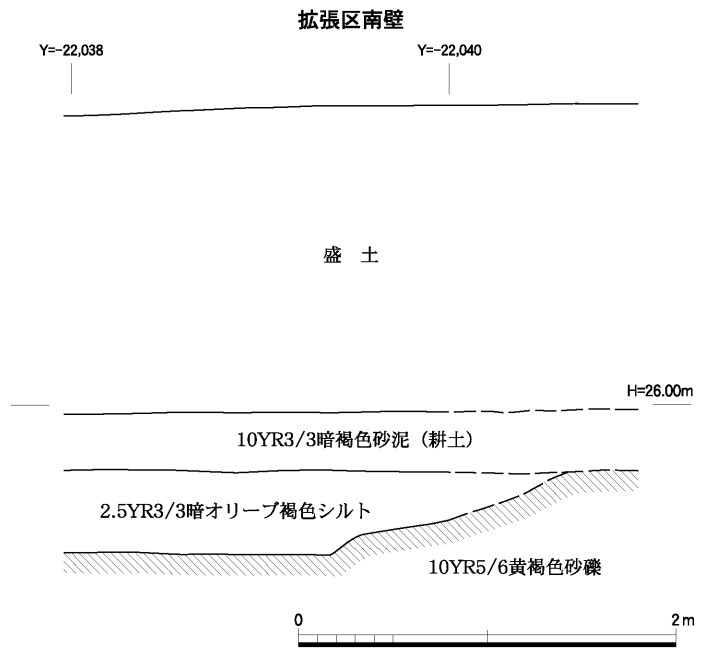


図5 基本層位図(1:40)

(2) 第1面 (図6、図版1-1)

調査区南壁に沿った東西方向の旧京都駅構内溝は、現京都駅開設直前まで機能したと考えられる。調査区北壁から西壁にかけて斜め方向に走る幅2mの水路によって攪乱を受けていた。他は

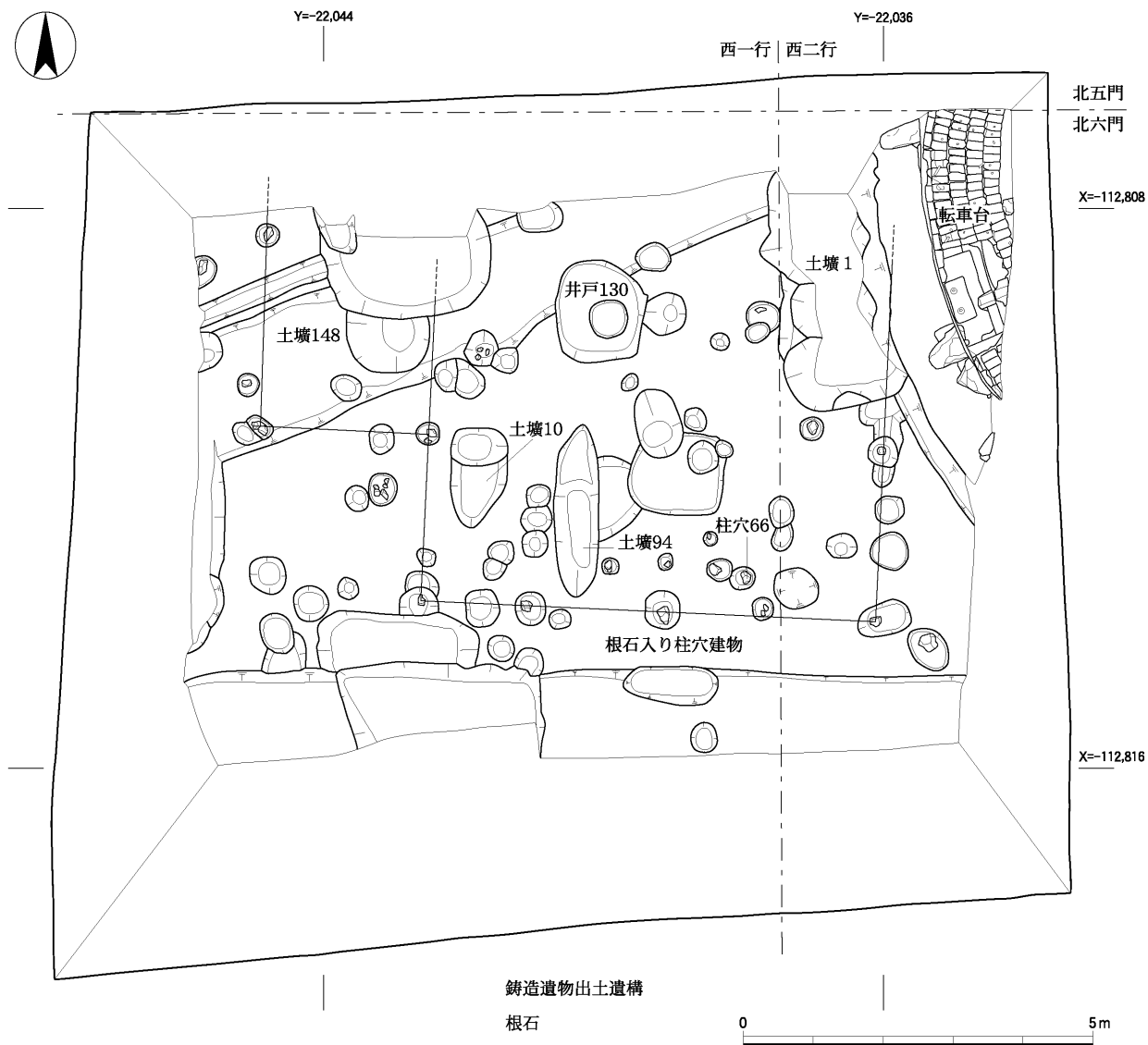


図6 第1面遺構平面図(1:100)

良好な状態で遺構が残存していた。ただし遺構面の直上が近世・近代の耕作土であり、中世の耕作土層を検出していないので遺構面が削平を受けている可能性がある。

以下、第1面の主要な遺構について述べる。

柱穴群 第1面で径約0.3～0.5mの多数の柱穴を検出したが、調査地が狭いため建物としては復元できない。柱穴の埋土は概ね黒褐色砂泥である。しかし径約0.2mの平らな面を上にした根石を伴う柱穴を18基検出している。そのうち柱穴列として3個以上並んで認識できるのは、調査区南半部で検出した東西方向の1列のみで、柱間は一定ではなく、西から1.5m、2.0m、1.5m、1.5mである。また、この柱穴列両端の2.4m北地点で、2基の根石を伴う柱穴を検出しているので、それらを結んで建物として復元した。近隣の調査では、根石を伴う柱穴は14世紀に入ってからのもが多い傾向がある。

土壇 1 調査区北部東側で検出した不定型な土壇で、北壁以北に広がり、東端は転車台基礎があるため規模は不明である。検出部だけでも南北方向3.5m以上・東西2.0m以上・深さは約0.5m

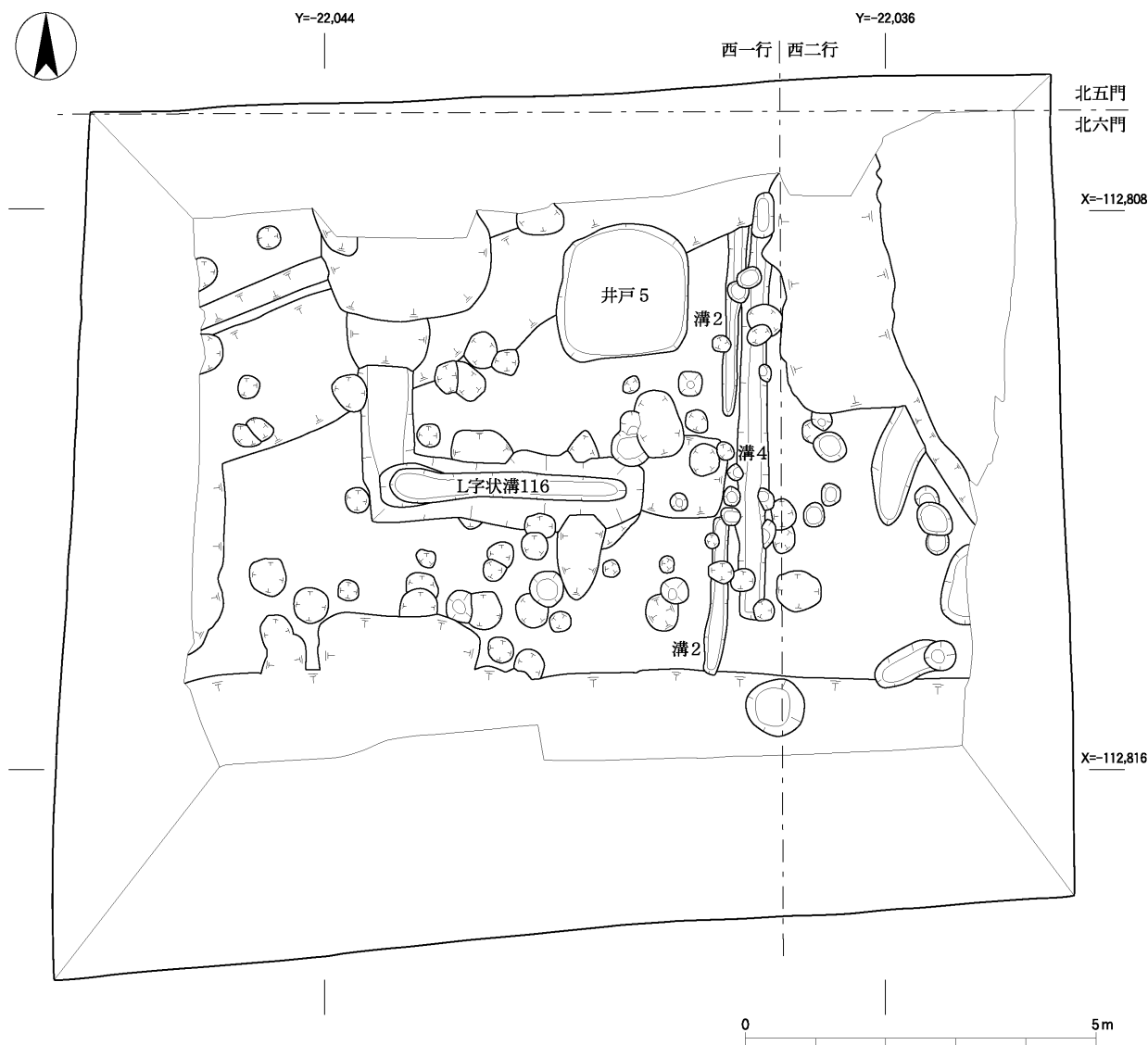


図7 第2面遺構平面図(1:100)

で、流路236に堆積したシルト層を掘り抜き、地山の砂礫・砂層に達している。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、掘形に凸凹がある。シルト層を採るための土取穴の可能性はある。

土壙94(図10、図版1-2・2-1) 調査区中央部で検出した、長軸約2.5m、幅約0.7m、深さ約0.4mの薬研堀状の土壙である。埋土に焼土や炭が混じった褐色灰層が挟まれており、各層から14世紀前半の土器類と共に割れた鏡鑄型などの鑄造関係遺物が破棄された状態で出土した。ただし、遺構自体に熱を受けた痕跡はなく、鑄造に用いられた遺構であるかは不明である。

土壙148 径約1.0m・深さ0.5mの土壙で、最下層に黒褐色の泥土が溜まっていた。

井戸130(図11、図版1-3・2-2) 西洞院大路から東に28m地点、土壙94の北側で検出した平面形がややいびつな一辺1.4mの方形、深さ約1.4mの木枠井戸である。この井戸は第2面で述べる大きな井戸5の南西部を切って成立しており、井戸5を再利用して造られた可能性が高い。井戸枠は腐食が激しく明瞭ではないが、幅約0.15~0.25m、高さ0.3m前後の縦板が一辺に4枚前後あり、四隅には隅柱が残存していた。また、この縦板を押さえる一辺約0.8mの井形に組まれた



図8 第3面遺構平面図(1:100)

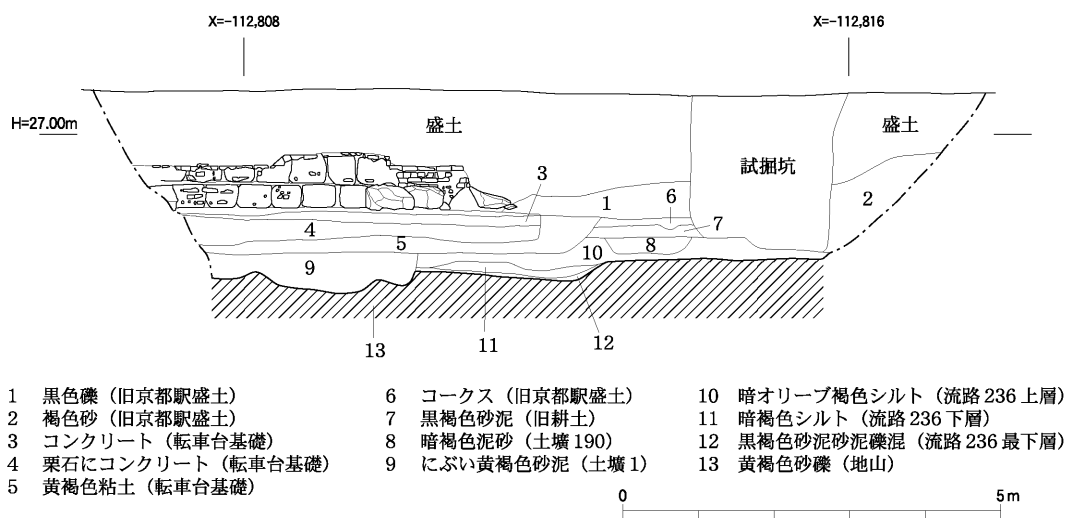


図9 東壁断面図(1:100)

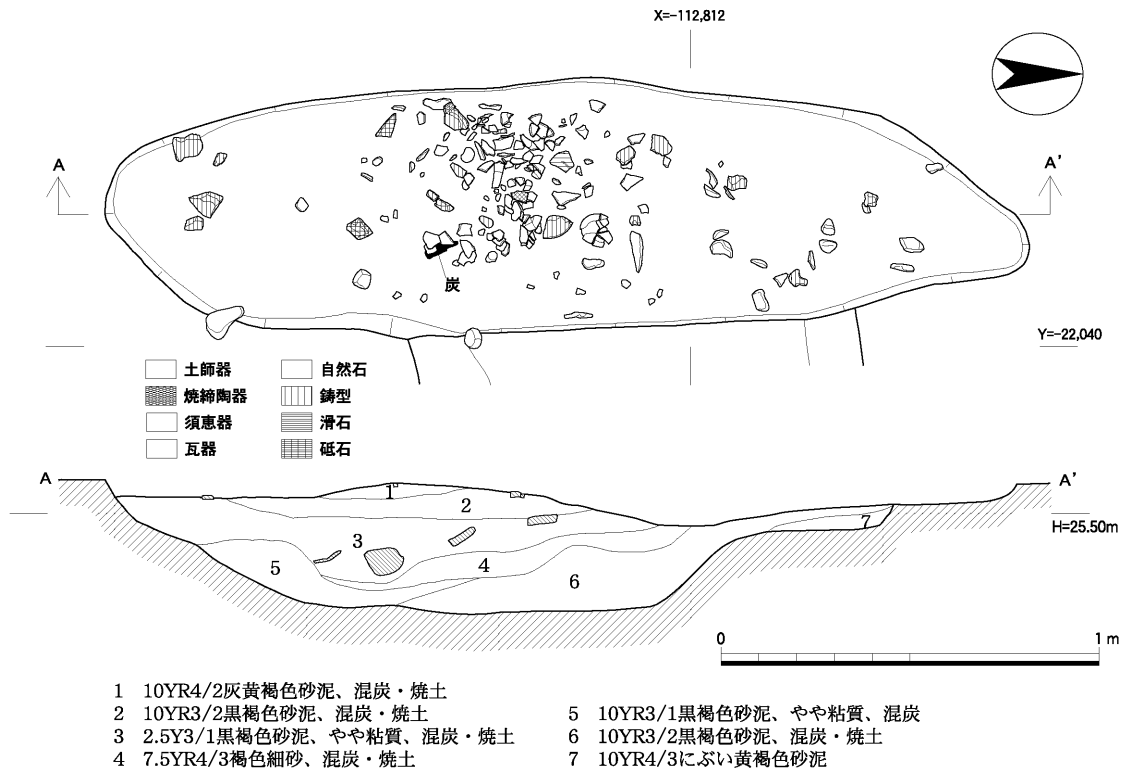


図10 土壌94実測図(1:20)

横棧が、井戸底と約0.4m上に2列残存していた。なお井戸底に、曲物を据えた痕跡と思われる径約0.55m、深さ約0.2mの円形の窪みを検出している。井戸内の埋土は、暗褐色砂泥の上層と、黒褐色砂泥の中層および井戸の木枠が残る泥砂や砂礫の下層に分かれるが、上層には土壌94同様の土器類や鑄造関係遺物がまとまって破棄されていた。井戸枠上部が崩れた後、井戸跡の穴に一括して破棄された状況を示しており、その上には径20cmほどの石が多量に投棄されていた。また井戸枠外の井戸掘形からも鏡の粗型片が出土している。

(3) 第2面(図7、図版3-1)

溝2・4 一・二行境推定ラインに2条の南北方向の溝を検出した。溝2は推定ライン0.7m西で幅0.2m、深さ0.05mで、埋土は黒褐色砂泥。溝4は推定ライン0.4m西に位置し、幅0.35m、深さ0.1mで、検出長は6mある。南端は途切れ、北端は一段深くなり0.2m程深く掘られていた。埋土は褐色砂泥である。溝4から13世紀初頭の土師器皿が出土している。2つの溝の前後関係は不明である。

柱穴群 第2面の柱穴は、第1面の柱穴に比べて少なく、第1面同様、建物などとして復元できない。溝2・4の周辺に径約0.2m程の柱穴が集中している。

井戸5(図11) 流路236に堆積したシルト層を切って成立している。一辺約1.8mの方形、深さ約1.1mの井戸である。井戸枠部分は井戸130に壊され不明である。井戸枠外の埋土は黄褐色の砂・砂礫である。出土遺物は少なく時代確定がしにくいだが、井戸130によって再利用されていることから時期差はあまりないものと考えられる。また鑄造関係遺物は検出していない。

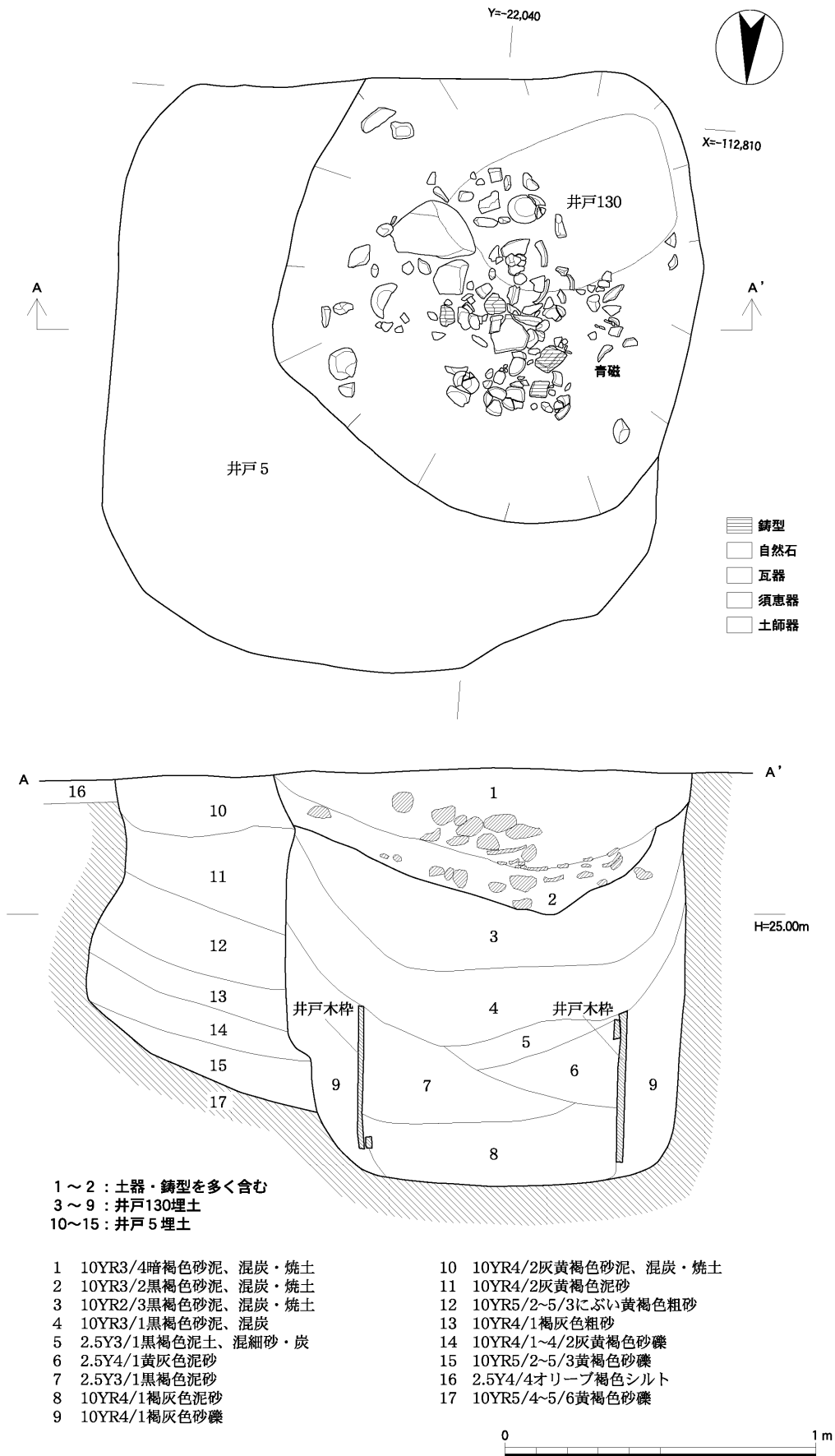


図11 井戸5・130実測図(1:20)

L字状溝116（図12、図版3-2） 調査区中央部で土壙94に切られているL字状の溝である。南北方向の北側は近代の水路と土壙148などによって切られているため不明であるが、東西約4.0m、南北約2.2m、幅は0.7～1.1m、深さ0.15～0.6mを測る。東西方向溝部分は、南北方向溝に比べて一段深くなっている。埋土は黄褐色から黒褐色砂泥であり、東西方向溝の上層から中層にかけて13世紀初頭の土師器・瓦器などが多量に出土した。なお、この遺構は鑄造関係遺物をまったく含まない。

（4）第3面（図8、図版4-1）

流路236（図版4-2） 調査区東部で、調査地南北を貫く流路と考えられる深さ約0.4mの落ち込みを検出した。調査地の北東から南西に延び、調査区外に続く。流路の幅は、北側が土壙1に切られているため不明であるが中央部では3m以上あり、南側が南壁断ち割りで確認したところ3.5mである。しかし急激に狭くなるくびれ部分が南部と北部の間にあり、流路の平面形は瓢箪状となる。幅が広いところは底が平らで、池もしくは湿地の可能性もある。埋土は礫を含まない混じりけのない暗オリーブ褐色のシルト系微砂の堆積で、水が北東から南西へ流れていたと考えられるが、北端の底レベルと南端の底レベルが同じ25.2mである。このシルト層上層には9世紀から10世紀までの土器が入っていることから、10世紀から11世紀にかけてシルトが埋まっていたものと考えられる。ただし南東部の岸は西岸より20cmほど低くなっており、岸上にシルトが堆積しているので、もう一段高い岸が東に存在する可能性がある。また部分的に最下層と岸辺には5cm程度の厚さで円礫と黒褐色砂泥が堆積しており（くびれ部以南からはこの層は検出していない）とりわけ北部西岸は円礫を意識的に貼り付けたようにも見える。岸辺の円礫と黒褐色砂泥層中からも平安時代前半の土師器破片を検出している。しかし地山の礫層と同種類の円礫で、自然流路か人為的な池かは現時点では確定できない。

柱穴 10世紀の土師器のみが埋まっていた柱穴を検出したが、建物としてはまとまらない。

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代前半	流路236・柱穴など	
鎌倉時代前半	L字形溝116・井戸5・柱穴など	
鎌倉時代後半	土壙1・土壙94・井戸130・土壙10・柱穴など	
江戸時代	耕作土層	
近代	転車台	

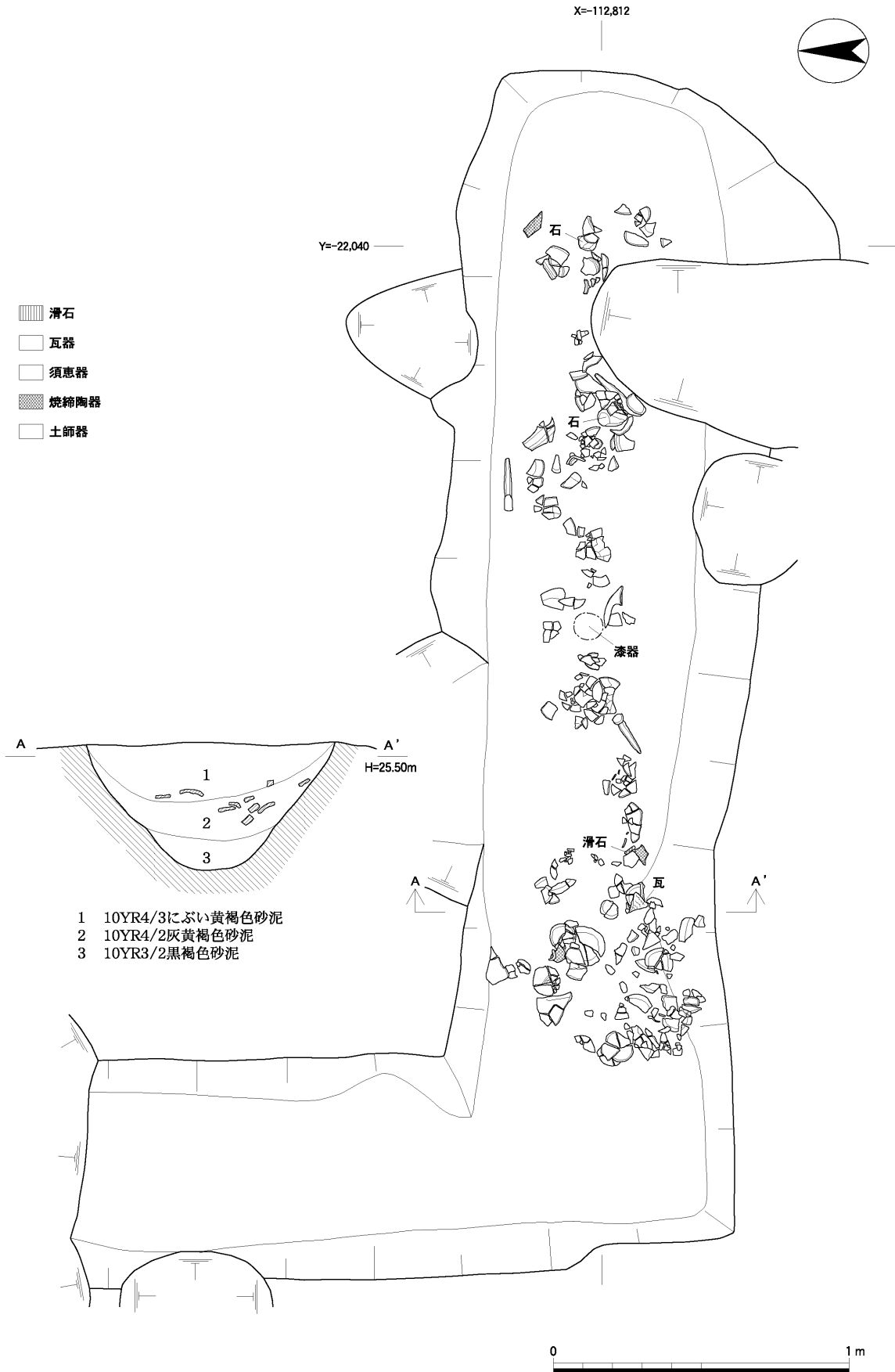


図12 L字状溝116実測図(1:20)

(5) 京都駅関連遺構

機関車転車台 重機掘削中に調査区東壁北側で、煉瓦で構築された転車台の土台西側部分を検出した。台車部はすでに撤去され、基礎部分が残存していた。煉瓦の積み方は、段毎に煉瓦長手面だけと小口面だけを段違いに積み上げる「イギリス積み」である。転車台円周の煉瓦部分は、幅約1.1m、高さ0.7mである。転車台基礎は、コークスで地上げされた京都駅旧地表面を掘り込んで造られており、拳大の栗石を0.6mの厚さでコンクリートで固め、さらにその下に黄褐色粘土を入れていた。この基礎部と煉瓦による立ち上がり部には、約50cmの花崗岩割石を放射線状に並べて補強していた。

註

- 1) ここでシルト層としたものを粒度分析したところ「国際土壌学会法による土の分類でSCL砂質植壤土に相当する。全鉱物組成は軽鉱物が主で他に岩片・重鉱物が続き、火山ガラスも少量含む。このうち軽鉱物は石英・カリ長石が主で、斜長石も少量だが含まれる。重鉱物は圧倒的に黒雲母が多く、他に緑色角閃石・不透明鉱物などが含まれる。」(株式会社 京都フィッション・トラック)との結果が出た。以下便宜上シルト層とする。

4 . 遺 物

(1) 遺物の概要

遺構成立面となる砂礫層から石器と磨滅した古墳時代の須恵器が出土した。また流路236から平安時代前期から中期の土器類が出土した。中世の出土遺物の組成・量に関しては、近隣の調査とほぼ同一の傾向を見せており、13世前半から14世紀前半がピークをなす。また輸入陶磁器の出土量が他の京域に比べて少量なのが特徴的である。これらの中世遺物群は、14世紀初頭の鑄造関係遺物を含む遺物群と、13世紀初頭の鑄造関係遺物を一切含まない遺構群に大別できる。とりわけ鑄造関係遺物が多量に出土した土壌94・井戸130の埋土を篩にかけ洗浄したところ、総計2,172点、11,858gの真土・粗型・屏風・火口・砥石・銅滓・鉄滓に選別できた(表4)。

中世の遺物は今回の調査では15世紀を下限とし、それ以降の遺物は近世から近代にかけての耕作土層や水路から出土した遺物以外検出していない。なお土壌1から黄釉鉄彩盤破片と折曲式剣頭文軒平瓦破片を検出しているが、いずれも混入品である。今回の調査では11世紀～12世紀代および15世紀以降の遺物が極端に少ない。

なお土師器の編年観は、平安京・京都¹⁾ 期から 戦期の編年案による。

(2) 土器類 (図13 ~ 15、図版 5 ・ 6)

砂礫層出土土器 (図13 - 1 ~ 3) 古墳時代末期と考えられる須恵器杯・鉢を検出した。須恵器杯は磨滅が激しく、杯蓋の可能性がある (1) は篋起こしの痕跡が微かに窺える。大型の (2) は焼きが甘く粘土を底中心から巻き上げた痕跡がある。(3) の須恵器鉢は底部が丸く膨らんだ底部外面に磨滅があり、焼成前に穿った細い穴が2箇所に見られる。体部外面にカキ目を施す。

流路236出土土器 (図14 - 4 ~ 19) 平安時代前期から中期の遺物が一定量出土しており、土師器 (4 ~ 6) 黒色土器 (7) 緑釉陶器 (8 ~ 11) 灰釉陶器 (12) 須恵器 (13 ~ 19) を検出している。(4) は土師器碗で、器表が荒れているため図化できなかったが、体部外面にケズリまたはミガキの痕跡が微かに窺え、8世紀末に遡る可能性がある。また小片なので図示できなかったが、端部がての字状に変化している10世紀代の土師器も出土している。(5) は小型土師器甕で、

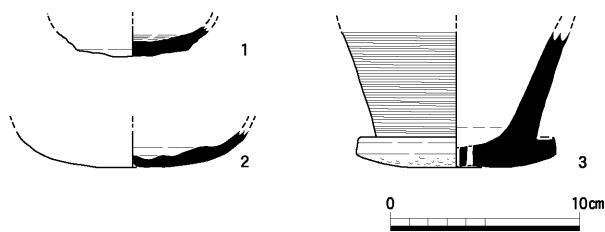


図13 砂礫層出土土器実測図 (1 : 4)

口縁端部が摘み上がる。外面に煤が付着する。(6) は大型の土師器甕で、胴部に粗い刷毛目がある。口縁端部内側に圈線状の摘み上げが廻る。(7) は黒色土器甕で、内面が黒色化し、外面は赤色化している。(8) は緑釉陶器皿で、(9) は緑釉陶器碗である。いずれも平台で高台裏面まで釉が

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代以前	石器	少量	石器1点	0箱	0箱
古墳時代	土師器、須恵器	少量	須恵器3点	0箱	0箱
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、石帯	3箱	土師器3点、須恵器7点、黒色土器1点、緑釉陶器4点、灰釉陶器1点、石帯1点	1箱	1箱
鎌倉時代前半	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入磁器、滑石製品	6箱	土師器9点、白色土器1点、瓦器2点、滑石製品1点	1箱	4箱
鎌倉時代後半	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入磁器、滑石製品、鑄造関係遺物	30箱	土師器26点、瓦器4点、輸入磁器1点、滑石製品2点、鑄造関係遺物35点、金属製品2点	2箱	24箱
近代	煉瓦	1箱		0箱	1箱
合計		40箱	104点 (6箱)	4箱	30箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より10箱多くなっている。

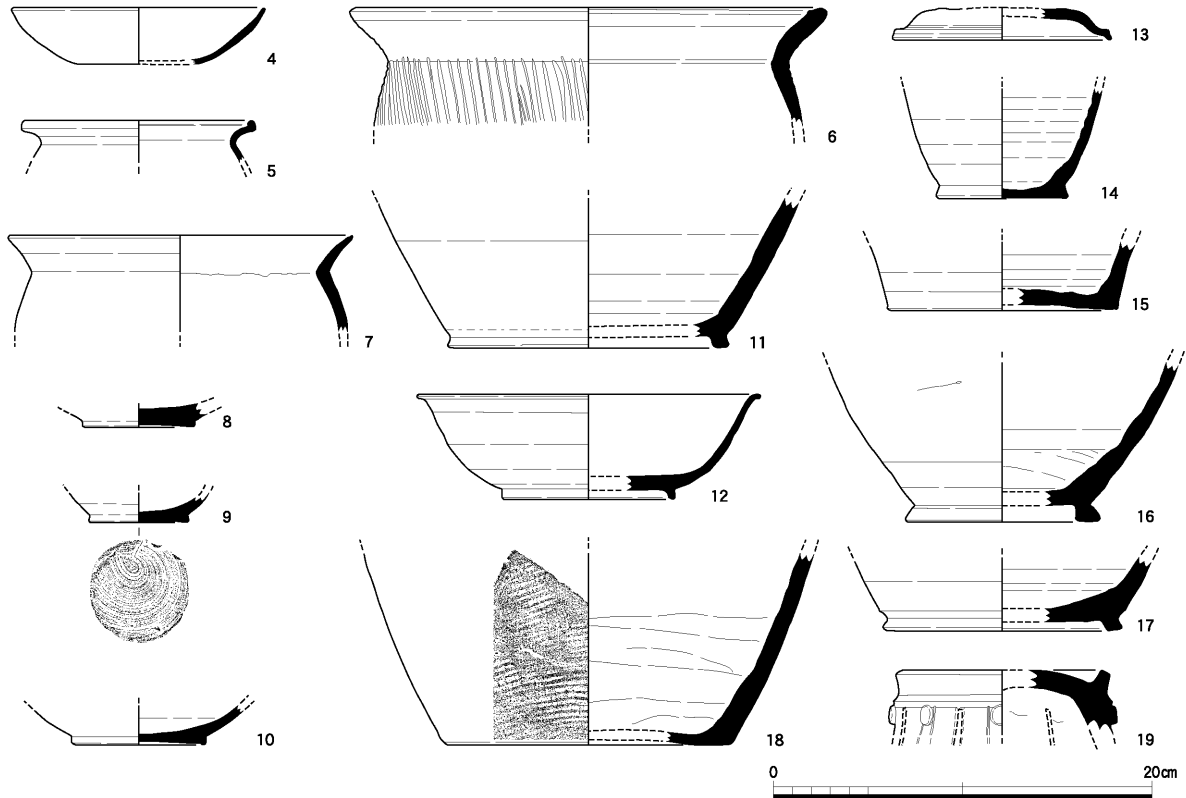


図14 流路236出土土器実測図（1：4）

掛かる。同じ平高台であるが、やや赤みがかった胎土の（10）は緑釉陶器碗で、高台裏面に釉はなく、糸切り痕が残る。以上の緑釉陶器は山城産で焼成が甘い。緑釉陶器壺と考える（11）は釉が褪せているため、他の器種である可能性もある。釉は高台付近まで掛かる。灰釉陶器碗の（12）は内面刷毛塗りである。（13）は須恵器杯の蓋であるが、摘みが付くかは不明である。（14）は須恵器壺で、内面に轆轤引きの痕が残る。焼成はやや甘い。（15）も須恵器平底壺で、底に糸切り痕がある。流路の底から出土した（16）は輪高台の須恵器壺で、焼成はよい。体部外面に横ケズリ痕が残る。（17）も輪高台の須恵器壺であるが、ケズリの痕跡がない。（18）は平底の須恵器壺である可能性がある。体部外面に平行叩きがあるが、内面に押さえた痕跡はない。（19）は須恵器の円面硯で、脚の上部に6個の付珠文が配され、その間に篋切りで縦長の窓を作る。これらの個々の遺物の正確な時期は確定できないが9世紀半ばの遺物が中心である。これらの遺物は、流路236に堆積したシルト層上層で多く出土している。上流から流れてきた可能性もあるが磨耗はない。また河川に流す祭祀関係遺物を特に示すものでもない。

溝4出土土器（図15 - 20） 溝4底から出土した径約9cmの小型土師器皿で、以下に述べるL字状溝116出土土師器皿とほぼ同時期である。13世紀初頭前後のもの。

L字状溝116出土土器類（図15 - 21～31） 白土器系土師器を含まないのが特徴で、13世紀初頭前後の一括遺物である。土師器皿は径約9cmの小型（21～24）と、径約14cmの大型（25～28）とに分かれる。（29）は白色土器の高杯脚である。（30）は瓦器三足釜で外面・内面とも黒色である。（31）は瓦器碗で、樟葉産で内面にミガキがある。

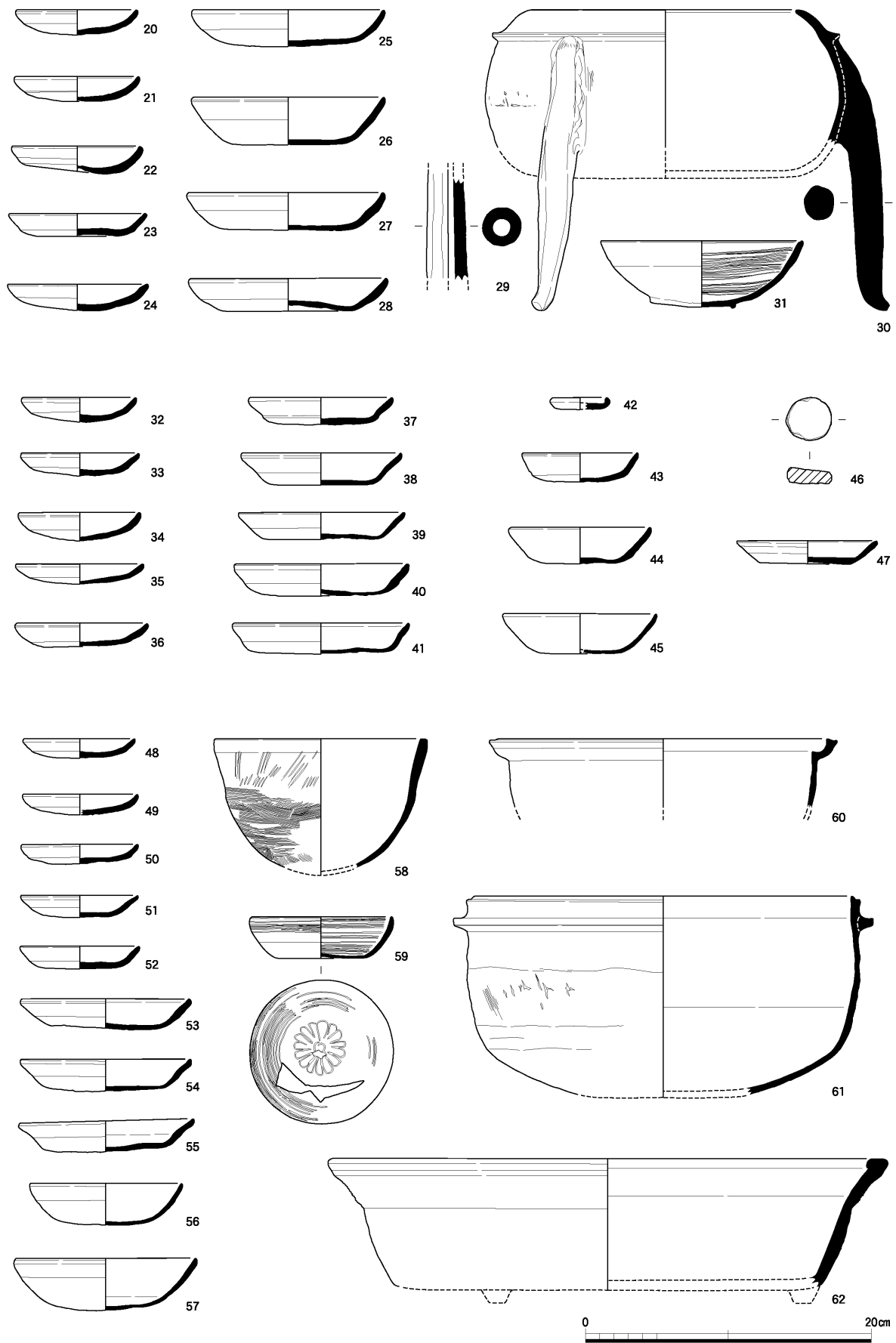


图15 溝4・L字状溝116・土壙94・井戸130出土土器実測図(1:4)

土壙94出土土器類（図15 - 32～47） 14世紀初頭前後の一括遺物である。土師器皿に白土器系が混じる。へそ皿はない。赤土器系土師器皿は、径約8.5～9.5cmの小型（32～36）と、径約10～12.5cmの大型（37～41）に分かれる。白土器系土師器皿は、径4.5cmのコースタ型皿（42）と、径約8～11cmの椀に近い皿（43～45）に分かれる。（46）は土師器を割って作製された円形製品であるが、用途は不明である。（47）は口禿白磁皿である。

井戸130出土土器類（図15 - 48～62） 出土遺物から土壙94との時期差はほとんど見られない。図化したものは、井戸が破棄された上に破棄された遺物である。赤土器系土師器皿は、径8.0～8.5cmの小型（48～52）と、径12.0～12.5cmの大型（53～55）に分かれる。白土器系土師器は、径約11.5cmの土師器皿（56）と、径約13cmの土師器皿（57）がある。（58）は京都駅周辺で顕著に出土する丸底小鉢であるが、大型の部類に入る。外面下部は細かい刷毛目を施し、口縁に近い上部は粗い櫛目のようなもの斜め方向に施す。内面はスベスベしていて摺鉢状になっている。焼成はよく胎土も密である。外面の一部に黒い斑模様の斑点がある。（59）は平底の瓦器椀である。内面中央に菊花文の暗文がある。内面外面とも横方向のミガキがある。（60）は瓦器鍋で、（61）は瓦器羽釜である。（62）は瓦質円形火鉢で、底部に靱殻の圧痕が付着する。

（3） 鑄造関係遺物（図16～18、図版7・8、表4・5）

鑄型（図16・17 - 63～79） 今回の調査では、和鏡以外の鑄型を検出していない。（63～65・68・70・71・77・78）が土壙94、他は井戸130からの出土である。和鏡の製作過程および道具類の名称に関しては禁裏御用鏡司青家に伝わった鏡製造控え書である『御鏡仕用之控え書』²⁾に従う。和鏡の鑄型は、鑄湯と接する微砂を主体とする真土部と、粘土に靱殻を多量に混ぜた硬く焼き上がった粗型部からなる³⁾。真土は脆く、指先だけで微砂と粘土と考えられる粉末状のものに分解する。その質感は滑らかな表面を除いて内部はザラザラしており、雲母細片が多く混じっている。近世の緻密な真土に比べてむしろ鑄砂に近い。粗型胎土には雲母がほとんど見られず基本的に土

表4 土壙94・井戸130出土鑄造関係遺物一覧表

	粗型	真土	屏風	埴埴	羽口	銅滓	銅	砥石	鉄滓	計
土壙94	163個	681個	2個	26個	1個	67個	5個	11個	3個	959個
	2,495 g	629 g	545 g	875 g	50 g	98 g	1 g	370 g	50 g	5,113 g
井戸130	343個	208個	3個	16個	3個	570個	7個	9個	54個	1,213個
	3,330 g	103 g	695 g	950 g	410 g	662 g	120 g	228 g	247 g	6,745 g
総計	506個	889個	5個	42個	4個	637個	12個	20個	57個	2,172個
	5,825 g	732 g	1,240 g	1,825 g	460 g	760 g	121 g	598 g	297 g	11,858 g

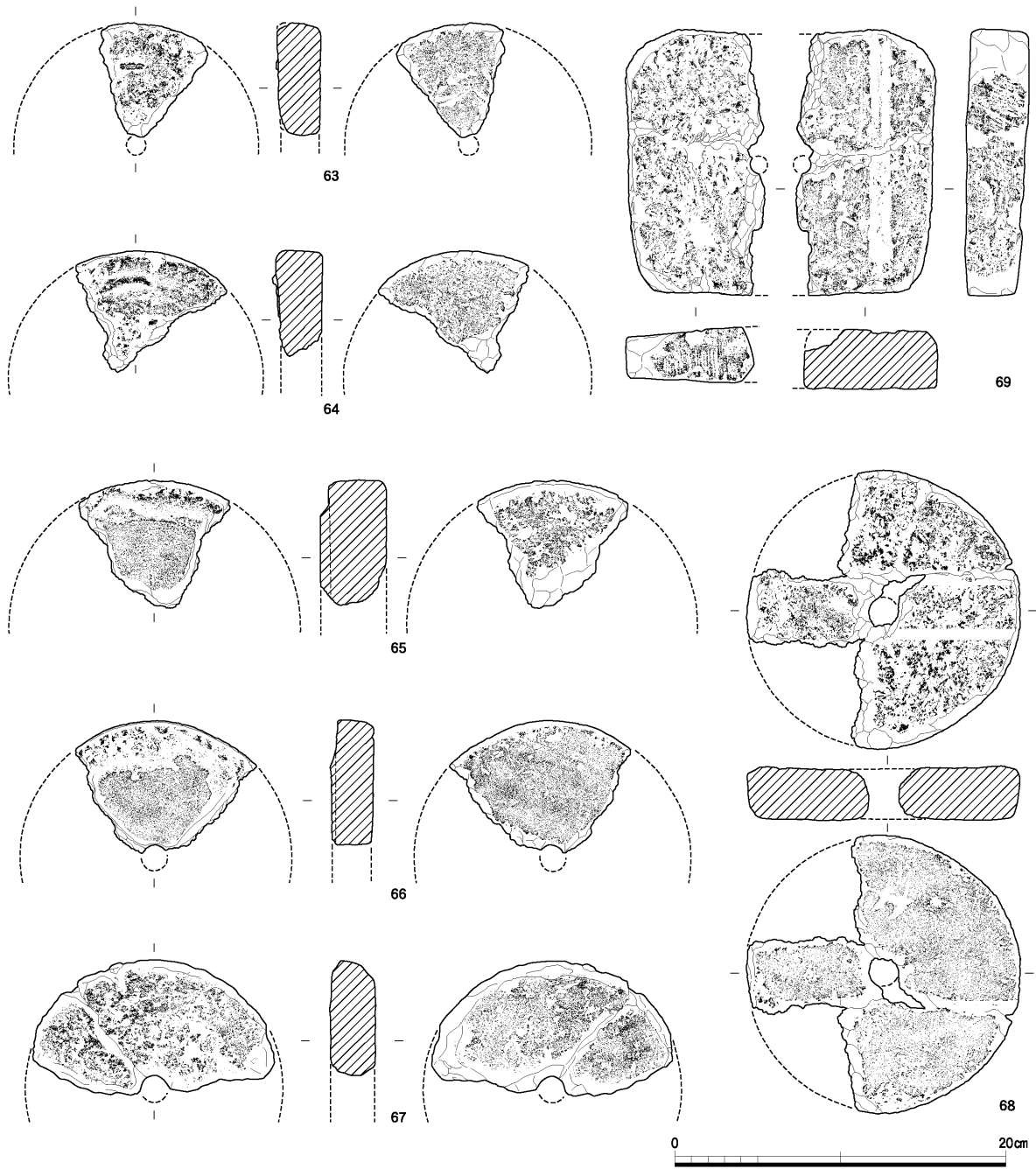


図16 土壙94・井戸130出土鏡鑄型拓影・実測図(1:4)

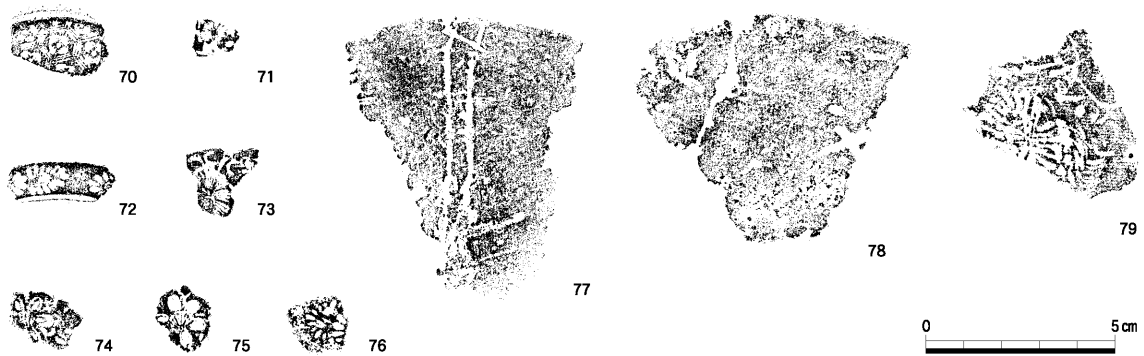
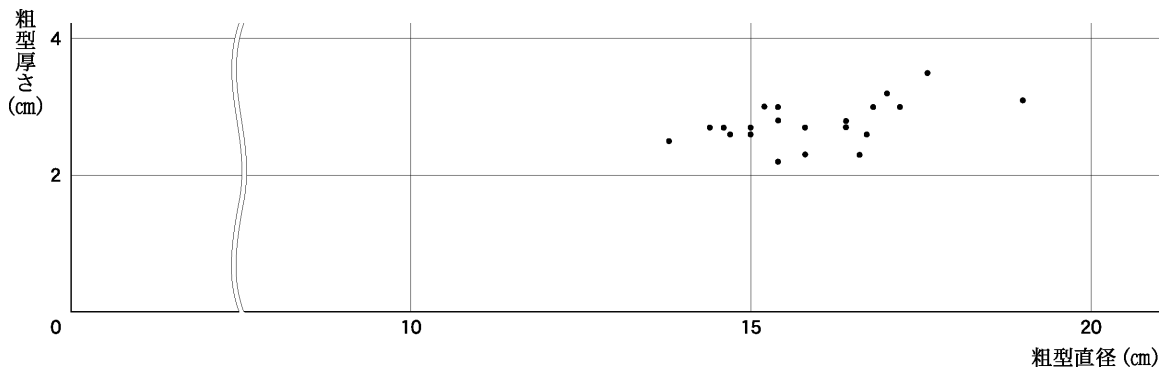


図17 土壙94・井戸130出土真土模様・粗型裏へラ書拓影(1:2)

表5 鏡鑄型計測値分布表



師質で、硬く焼き締められているため、真土部と粗型部は容易に分別できる。

真土部の鑄面が残存している粗型は、鏡表面となる2点(65・66)だけである。真土の厚さは(65)が0.5cmで、(66)が0.3cmである(計量表では粗型で集計)。(65)の鏡面となる真土表面には、裏面の鑄型が合わさった痕跡が残存しており、直径13cmの和鏡を製作したと考えられる。また(66)の真土中央部はわずかに凹んでおり、凸面の鏡が製作された可能性がある。しかし、その他は小片と化した真土片と、真土部を欠いた粗型片に分かれて出土した。

粗型は土壙94・井戸130から総計506片・5.825g出土したが、完形品はない。方形鏡を鑄たと考えられる3点を除いて、すべて円形鑄型で、復元径15~20cm・厚さ3cm前後である。円形粗型の断面は、台形状と長方形があるが、台形状が多く、真土は幅の広い表面に塗られている。真土の剥落した粗型剥離面は、粘土に靱殻が多く混ぜられた痕跡がある。粗型裏は平坦であるが靱殻圧痕のあるものがあり、型で作られた可能性がある。方形粗型も含めて全ての粗型中心部に径1.5cm程の鳥目の穴が穿たれており、その穴を埋める真土が残存しているものがある。また粗型側面には真土が付着したものがあり、裏表の鑄型を接合するために湯入れする前に塗りつけたか、もしくは挽型で真土を塗る際に付着したと考えられる。(69)の方形粗型裏面には、幅1cmほどの溝状の押し当てられた痕跡があり、側面には糸切痕か木目による縦線が入るが、円形粗型にはない。

真土は土壙94・井戸130から889点・732g出土したが、多くは模様のある面の厚みのある円周部で占められ、模様部は少量である。また和鏡周縁の高さは、真土円周部の残存高から1.2cm程に復元できる。また円周部となる真土中に真土表面部が残存した小片を検出しており、真土が再利用されていたことが窺われる。真土の模様はスタンプされた亀甲文が最も多く、他に菊花文・宝相華文などがある(70~76)。粗型の大きさや量産性に適したスタンプ文様から、14世紀前半の特徴を備えている。粗型裏面には篋記号もしくは手習いと思われる篋模様があるものもある(68・77~79)。また流路236に堆積していたシルト層と真土に雲母片を多く含み、粒度も酷似していることから、化学分析によって両者を比較した結果、同じ珪砂を主体とした組成で、粒度もほぼ同一で、鑄砂として真土の使用に耐えることが判明した⁴⁾。したがって、流路236に穿たれた土壙1は鑄砂を取るための土取穴であった可能性がある。

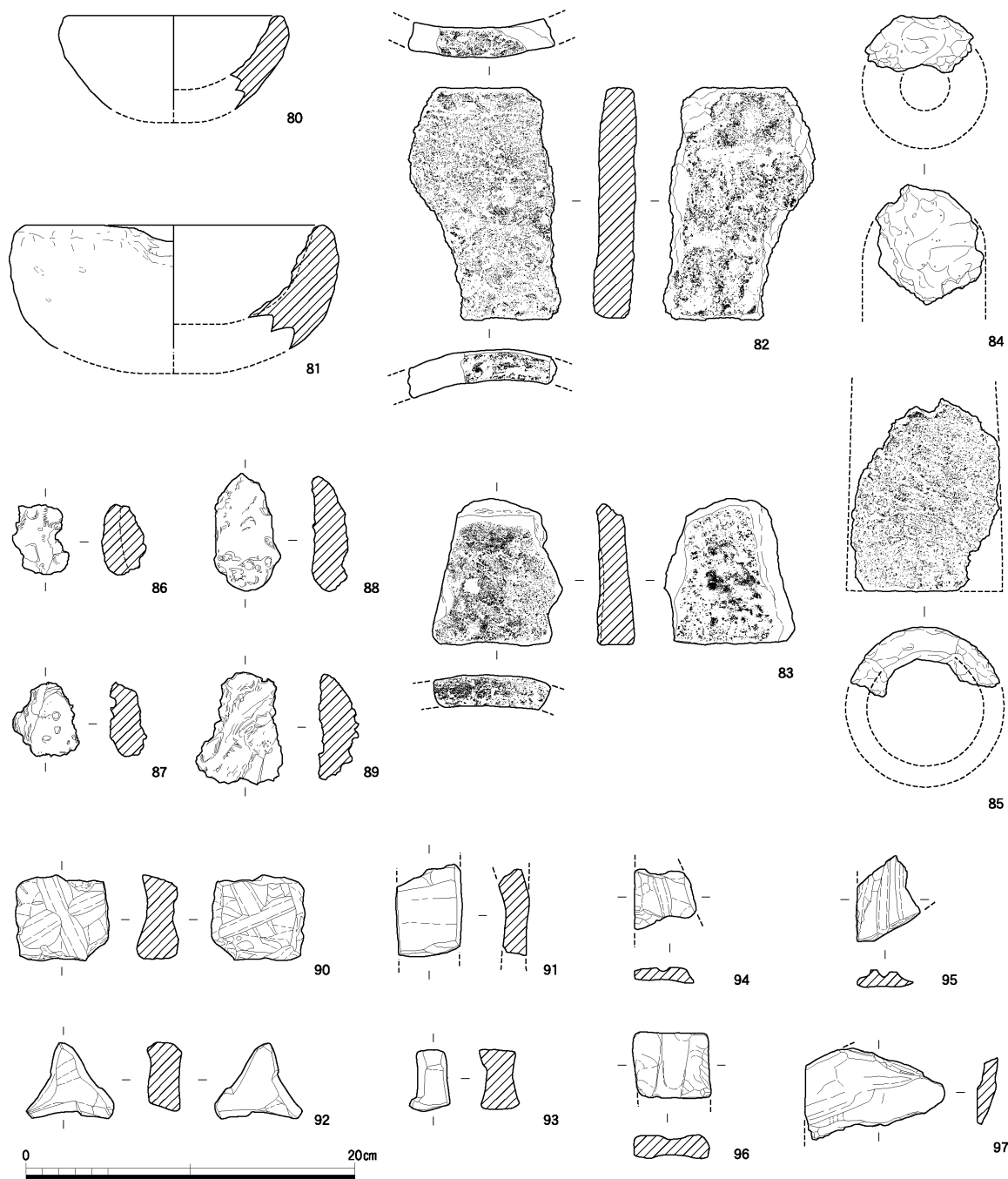


図18 土壌94・井戸130出土鑄造関係遺物拓影・実測図(1:4)

坩堝(図18-80・81) 内面および端部にはガラス質の銅滓が厚く付着する。(81)は注ぎ口がある。胎土は粗型と同じで粘土に多量の粕殻を入れている。大小があるが、どちらも小型であることからトリベの可能性もある。図化したものは、いずれも土壌94出土である。

屏風(図18-82・83) 『御鏡仕用之控書』に「屏風」と称する平瓦状のものが描かれており、その説明に坩堝の上にこれを2枚立て、間に羽口を差し込むとされる遮蔽器具である。残存している両端部の一方の端部および凹面に、ガラス質の銅滓が厚く付着している。両側は欠けているため不明である。胎土は粗型・坩堝・羽口と同じで粘土に多量の粕殻を入れている。この屏風凸面に斜め方向の瓦の糸切り痕に似た痕跡がある。図化したものは、いずれも土壌94出土である。

羽口（図18 - 84・85） 埴埴に向けられる先が細くなる先端部（84）と、鞆に接続する尻部（85）が出土した。胎土は粗型・埴埴と同じで粘土に多量の粗殻を入れている。先端部にはガラス質の銅滓が厚く付着する。表面に斜め方向の瓦の糸切り痕に似た痕跡がある。図化したのは井戸130から出土したものである。

銅滓・鉄滓（図18 - 86～89） 土壌94・井戸130から銅滓が637点・760g、鉄滓が57点・297g出土している。（86～88）は銅滓で、（89）は鉄滓である。鉄滓には弱い磁石の反応がある。銅滓12点・鉄滓3点を蛍光X線分析で測定したところ、銅滓については4基の炉跡を検出した左京八条二坊十四町・十五町の分析例とほぼ同様で、白銅鏡特有の錫よりむしろ鉛が多いという結果を得た。⁵⁾ 今回の蛍光X線分析では、鉄も検出されており、銅・鉛・鉄の含有率から渡来銭を鑄潰して原料としていた可能性が高い。また銅を含まない鉄滓を検出したことは、鉄製品も鑄造していた可能性を示唆する。

砥石（図18 - 90～97） 砥石は鑄造遺物関係が多く出土した土壌94・井戸130から20個出土しており、鑄造製品の研磨もしくは道具に用いられた可能性が高いので、この項で述べる。砥石の材質は、様々な形状に研ぎ込まれた流紋岩（90～93）と、平板な形状の鳴滝産砥石型珪質頁岩（94～97）に分類できる。前者は質感がザラザラしており中砥か粗砥、後者は仕上砥であろう。研がれた凹凸の形状は様々で、鋭い溝状のものから滑らかな凹みのものまでである。直接製品を研いだのか道具を研いだのか不明であるが、（92・93）はすべての面に研いだ痕があり、提砥であった可能性が高い。

（4）石製品（図19・20、図版8）

石器（図19 - 98） 地山砂礫層からサヌカイトもしくは珪質頁岩と考えられる石器を1点検出している。（98）はナイフ形石器で、刃部片面に使用痕とみられる剥離痕が認められる。

石帯（図19 - 99） 井戸130から巡方黒色石帯が出土した。石帯は1/4に割れているが、方形で断面が台形状になっている。表と側面は丁寧に磨かれ光沢を放つ。裏面は平に加工してあるだけでザラザラしており、ベルトに固定するための潜穴が穿ってある。

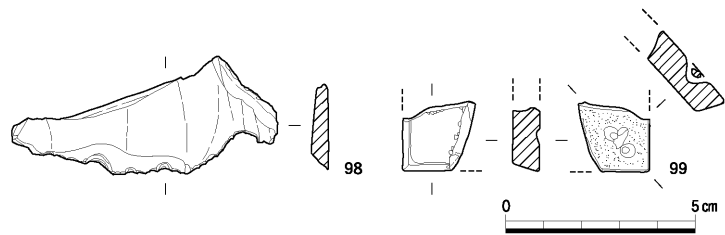


図19 石製品実測図（1：2）

本来は完成品であったと考えますが、調査地の北東に位置する八条三坊七町で平安時代前期の未完成品を含めた多くの石帯が検出されている。⁶⁾

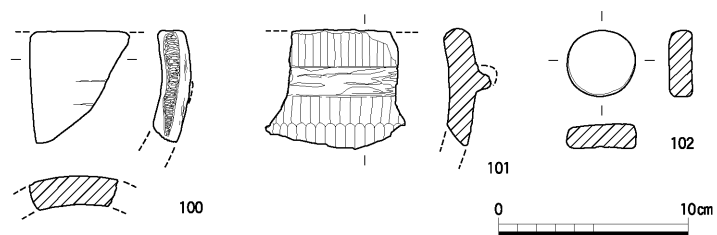


図20 滑石製品実測図（1：4）

滑石製品（図20 - 100～102） 九州産鍔付きの滑石鍋片である

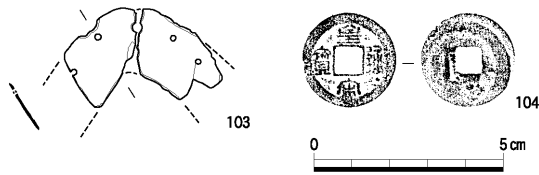


図21 金属製品拓影・実測図（1：2）

が、再加工した痕跡が残存する。(100)は鍋内側と外側から削って割った痕跡がある。溝116から出土。(101)は鍋下部の割れ部を削って面をなしているが、他の面は未加工である。温石に転用した可能性が高いが、(102)のように円形に加工したものもあり、他の用途もあったのかもしれない。(101・102)は井戸130から出土。近辺の調査でも多くの滑石鍋片を検出している。

(5) 金属製品 (図21)

金具 (図21 - 103) 柱穴66から薄い板状銅製金具破片が出土した。平面形はL字状で、5個の穴が側辺に沿って空いている。片面に渡金を施した痕跡がある。

銭貨 (図21 - 104) 鑄造関係遺物の屏風が出土した土壌10から皇宋通寶 (1034年初鑄) が1枚出土した。裏面に二重の范ずれが認められる。

(6) その他の遺物

煉瓦 転車台関連の遺物としては、4個体の煉瓦を転車台から採取した。煉瓦の1個の大きさは平均で縦22.9cm、横10.8cm、厚さ5.95cmを測る。これは「鉄道における煉瓦の品質管理基準の変遷」⁷⁾によって煉瓦規格が縦21cm、横10cm、厚さ6cmの整数値で統一規格化される大正14年(1925)以前の煉瓦であることを示し、寸で規格化されていた縦7寸5分、横3寸6分、厚さ2寸の煉瓦に該当すると考えられる。すべての平面に縦1.7cm・横1.1cmの小判形の陰刻があるが、生産地・企業名などは不明である。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要 第3号』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 2) 香取秀真「御鏡仕用之控書 註記」『考古学雑誌 第30巻第1号』1940年
- 3) 網 伸也「和鏡鑄型の復元的考察」『研究紀要 第3号』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
久保智康『日本の美術・第194号・中世・近世の鏡』至文堂 1999年 参照
- 4) この真土の粒土分析の結果はSCL砂質植壤土に分類され「軽鉱物(石英・カリ 斜長石が主として含み、その他は大部分黒雲母からなる重鉱物や岩片および少量の火山灰を含む。)(株式会社 京都フィッシュン・トラック)ので、流路236堆積シルト層と「全ての項目において酷似し、両者は対比可能である」ことが判明した。
- 5) 分析は内田俊秀氏(京都造形大学教授)による。『平安京左京八条二坊十四町・十五町発掘調査現地説明会資料』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 6) 『平安京左京八条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1982年
- 7) 小野田滋『鉄道と煉瓦』鹿島出版会 2004年

5.まとめ

今回の調査によって、平安京造営以前から今日までの該当地の歴史的変遷をおおまかに辿ることができたので、以下箇条書きにして報告する。

1) 古墳時代後半の遺物が礫層中に混入していることは、地山層とした砂礫層上層が古墳時代後半以降の堆積であることを示している。また高野川水系の礫が堆積していることは、それが鴨川の影響下にあったことを示す。

2) 流路236に堆積したシルト層は調査地東半部分を覆っており、流路が完全に埋まるまでオーバーフローを繰り返した不安定な環境にあったことが想定できる。調査地近辺の調査でも平安時代前期から中期の遺物を検出した多くの流路（八条三坊一町・二町・三町・六町・七町など）や池状遺構（八条二坊十四町）が検出されており、同様の状態であった可能性が高い。これらの流路は条坊に対して平行に流れていないのが特徴であるが、平安京造営前から存在していたのかは不明である。

流路236が完全に埋まったのは10世紀から11世紀代で、前記の流路が埋まったのも、その時期である可能性が高い。図22に示した西洞院大路や室町小路などを水路として整備することによって開発条件が整った可能性がある。11世紀から12世紀代までの確実な遺構は検出していないが、遺物は少量ながら検出している。周辺の状況から、この時期に1町規模の邸宅が三町にあってもおかしくない位置にあるが、調査地が狭いため不明である。

3) 今回検出したL字状溝116から出土した遺物内容が土師器・瓦器椀・瓦器鍋釜などが中心で、一・二行境に掘られた南北溝2・4などから13世紀初頭前後には調査地が町屋として開発されたのであろう。しかし、この時代の遺構には鑄造関係遺物は1点も確認できず、したがって鑄造関係の工人は、まだ入ってきていないと考える。13世紀前半の鏡鑄型が出土した西隣に位置する六町と対照的である。また南北溝2・4の存在は、四行八門制がまだ機能していることを暗示する。『東寺百合文書』に残存した東寺施入時の「八条女院院町在所目安注文」に八条院町の地点表示に戸主制が使用されており興味深い。

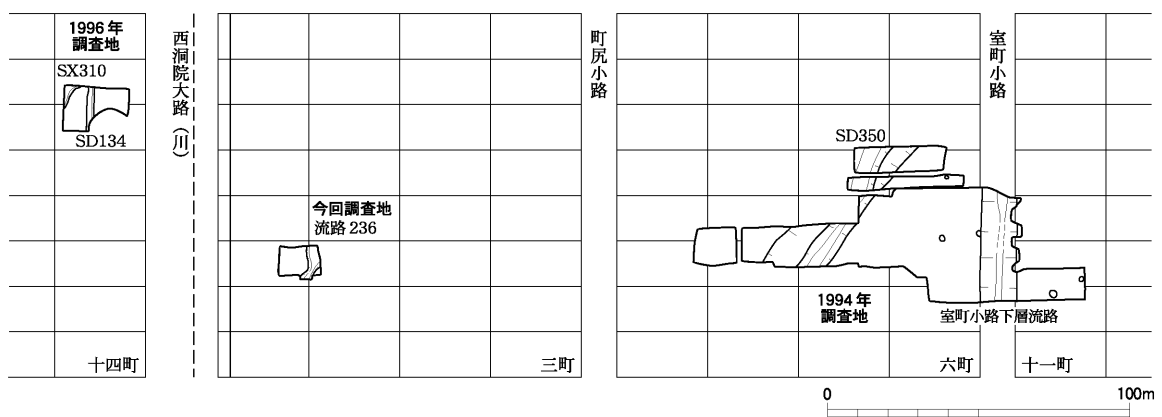


図22 平安時代流路模式図（1：2,500）

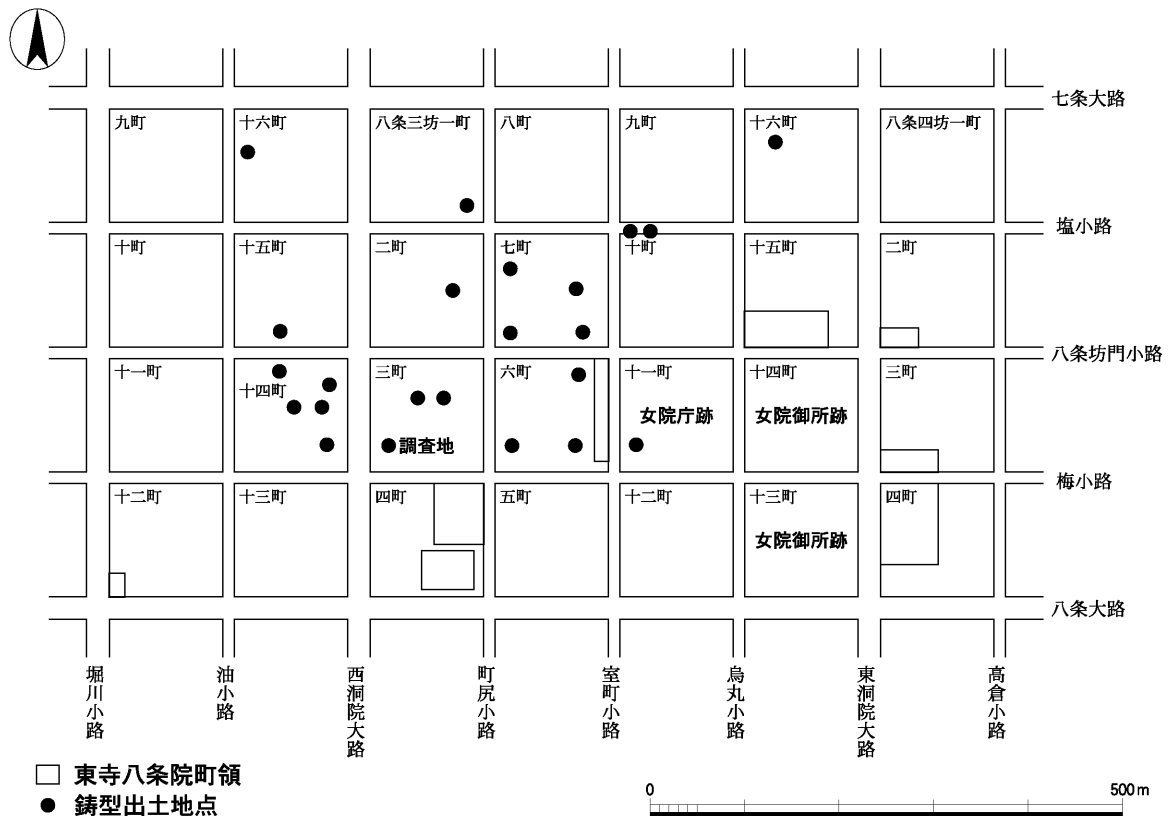


図23 鑄造関係遺物出土地点模式図（1：8,000）

4) 14世紀初頭前後の遺構には、鑄造関係遺物が多く混じるようになる。遺構・遺物ともこの時期が最も多い。根石を伴う建物が先に述べた溝2・4を越えて建てられ、その建物範囲に集中して検出された土壇94・井戸130などに破棄されていた鑄造関係遺物の多さから、鑄造工房であった可能性がある。井戸内に多くの鑄造関係遺物を破棄していた井戸130の井戸掘形からも粗型が出土していることは一定期間鏡を製作し続けていたことを示し、再び砕いて再利用される真土やまだ使用できる砥石などが破棄されていることは鏡製作が停止したことを示している。

5) 14世紀半ば以降の遺物としては定型化したへそ皿を検出しているが量は少量である。15世紀を境に遺物・遺構ともに消滅する。

6) 近世から明治にかけての耕作土を検出している。この時期には耕作地化していたこと示している。

7) 京都駅が開設された後、転車台が設置された。転車台の推定径は12mで小型に分類でき、機関車が大型化する前の転車台か、それ以降とすれば貨物車・客車などを移動させる小型機関車専用の転車台であろう。この転車台はコークス層を切って基礎が掘り下げられているので、京都駅開設以降に設置されたもので、その下限は規格煉瓦の寸法から大正14年以前である。

今回の調査は調査面積が狭く、検出した多くの柱穴から推定できる建物の復元案が1棟に留まってしまった。また調査地東半部で検出した平安時代前期から中期の遺物が埋まった流路が自然流路か人工的な流路であるかの確定も今後の課題となった。しかし、該当地での和鏡生産が行われた時期を14世紀初頭頃に絞れる。また調査地近辺に鑄物工房が集中した条件として、今回検出

した鑄型の真土と流路236に堆積したシルト層を化学分析し同定することによって、鑄物製作過程で最も厳選される真土の原料が現地で調達されていることが明らかにできた。また銅滓の蛍光X線分析によって渡来銭を原料とした可能性が高くなったことは大きな成果である。七条町は平安時代末期から南北朝時代に至るまで借上・土倉が集中した地域であり、日本の金融の中心地でもあった。調査地近辺が退蔵・蓄積された富が集中した七条町に位置していることは、原料を現地で調達できたことを示しており、また日本における銅鉱山が衰退した反映として、中世における渡来銭が果たしていた役割を明らかにできる資料となった。

八条院町は八条女院御所の院庁・御倉が解体して発展してきたとされているが、冒頭に述べたように今回の調査地は東寺領八条院町には含まれておらず、図23に示した鑄型出土地点の分布を見れば重なりが1箇所と少なく、むしろ商工業地帯であった七条町尻を中心とした七条町がさらに南に拡大してきたことも考えられる。調査地近辺は、原料の調達面・市場性・交通面からも鑄物師・銅細工にとって立地条件に優れていたことが今回の調査によって明らかとなった。

6 . 鏡鑄型と自然堆積層の分析

はじめに

これまでの京都駅前発掘調査で、鑄造に伴う鑄型が数多く出土している。これまで鑄型がどのような製品の製造に使用されたのかという報告はあるが、鑄型の原材料についての考察は少ない。今回の調査では流路236の自然堆積層が、肉眼と顕微鏡観察の結果、鉱物組成として雲母・石英・長石が多く見られ粒径も揃っているなど、鑄型の真土の組成と非常に良く似ていた。よって鑄型の真土と自然堆積層を胎土分析と粒度分析して比較検討することにした。

分析内容

試料として、1) 鑄型の真土、2) 鑄型の粗型、3) 自然堆積層の土サンプルの3点を選別し、分析に供した。分析は(株)京都フィッシュン・トラックに依頼し、その報告書¹⁾により述べる。

胎土分析では、全鉱物組成・重鉱物組成・火山ガラス形態分類・火山ガラス屈折率・斜長石屈折率などの分析を行った。全鉱物組成では真土・土サンプルが軽鉱物を70%以上含むのに対して、粗型は20%以下である。重鉱物組成ではいずれも黒雲母が約80~90%以上を占めている。火山ガラス形態分類・屈折率では真土・土サンプルはAT(始良Tn)よりK-Ah(アカホヤ)火山灰が卓越し比較的新しい時代の堆積物であることを示しているが、粗型は風化した火山ガラスしか見られない。斜長石屈折率では真土・土サンプルが花崗岩起源の土であると考えられる。粗型は観察と分析の結果から凝灰岩起源の可能性が指摘されている。

粒度分析は = 2mmから1/64mm(15µm)までの8種類のメッシュを用いて篩別を行った。1/64mm以下のものについては、粒径の確認できるもの(1/64mm>)と、できないもの(1/64mm>>)に分け10の粒径試料を得た。(1/64mm>)はシルト、(1/64mm>>)は粘土と考えられる。その結果、真土・土サンプルの粒径累積曲線が重なり合うほど酷似しており、ほぼ同じ粒径構成を持つ物質だとみなせる。そして粒度の最頻値は粘土成分を除いて、粒径で言えば1/2~1/8mmの細砂あるいは粗砂の細かい部分に表れている。また粒径毎の差異を見ると、粒径1/8~1/16mm以下は明らかに真土の方が割合を増加させている。これは真土の加熱による細片化、あるいは、真土の中に明らかに真土鑄型の破片が混入しており、その再利用時における粉碎の影響が出ていると考える事もできる。

小結

以上の胎土分析・粒度分析の結果から、真土と土サンプルは被熱の影響を考慮しても、同一のものでないと否定する材料が見当たらず、今の所はほぼ同じ原材料と考えたい。

通過粒径頻度グラフを見れば、土サンプルは1/2~1/16mmに粒径の揃った割と均質な細砂である。鑄型真土の原材料としてこの砂が選択された理由は、その珪酸塩分の多さと均質な粒径にあったと考えられる。

註

1) (株)京都フィッシュン・トラック「鉄道警察隊出土鏡鑄型の科学分析報告書」2005年

表6 胎土分析結果表(真土)

分析試料名: 1. 真土(鑄1-10、28-4)

全 鉱 物 組 成

火山 ガラス	軽 鉱物	重 鉱物	岩片	その 他	合計	備 考
2	156	25	17	-	200	火山gl: 珪長質bw型主gl。 軽鉱物: Qz, Kf > pl。 重鉱物: Bt主。GHb, Opq, Zr, Opx, Cpx含む。 岩片: 褐~灰色で微結晶の集合体。その他: ー。
1.0	78.0	12.5	8.5	0.0	100.0	

bw: パブルウォール, pm: 軽石, sco.: スコリア, pl: 斜長石, Qz: 石英, Kf: カリ長石, chal: カルセドニー

重 鉱 物 分 析

Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bt	Ap	total	備 考
	Opx	Cpx	BHb	GHb							
-	1	1	3	5	4	-	2	184	-	200	Btは大部分(181ヶ)赤褐色を呈し、被熱の影響の可能性大。 Epidote少量含む。
0.0	0.5	0.5	1.5	2.5	2.0	0.0	1.0	92.0	0.0	100.0	

Ol: カラン石, Opx, Cpx: 斜方、単斜輝石、BHb, GHb: 緑色・褐色角閃石、Opq: 不透明鉱物、

Cum: カンク頓閃石、Zr: ズルコン、Bt: 黒雲母、Ap: アパタイト

火山ガラス形態分類

Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It	合計	色付gl	備 考
8	19	5	2	-	-	-	34	+	珪長質で全体に薄手。bw型主。 濃い色付きglを含む。
23.5	55.9	14.7	5.9	0.0	0.0	0.0	100.0		

H: 扁平、C: 中間型、T: 多孔質、It: 不規則型、incl: インクルージョン、devt: 失透化、RI: 屈折率

火山ガラス屈折率測定

屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測 定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
最小	最大				
1.4991	1.5010	1.4999	10	1.500	H,C, ←AT gl
1.5088	1.5118	1.5103	13	1.510	H,C, ←K-Ah gl

鉱物の屈折率測定

屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測 定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	鉱物の種類 pl
最小	最大				
1.529	1.544	1.536	51	1.538	オリゴクレイス>アルバイト
1.547	1.560	1.552	5	-	アンデシソ~ラブラドライト

斜方輝石: 劈開片上での最大屈折率 $n_2 \approx \gamma$ 、角閃石 $n_2 (\beta < n_2 < \gamma)$ 、

斜長石: 劈開片上での最小屈折率 $n_1 (\alpha < n_1 < \beta)$

表7 胎土分析結果表(粗型)

分析試料名: 2. 粗型 (28-2)

全 鉱 物 組 成

火山 ガラス	軽 鉱物	重 鉱物	岩片	その 他	合計	備 考
-	39	1	160	-	200	火山gl: 検出されず(すべて変質)。 軽鉱物: Qz主。Kf少量。plは微量。 重鉱物: 少量。Bt, Opq主。BHb, Ap含む。 岩 片: 白~灰白色で微細結晶の集合体。その他: -。
0.0	19.5	0.5	80.0	0.0	100.0	

bw: パブルウォール, pm: 軽石, sco.: スコア, pl: 斜長石, Qz: 石英, Kf: カリ長石, chal: カルセドニー

重 鉱 物 分 析

Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bt	Ap	total	備 考
	Opx	Cpx	BHb	GHb							
-	-	-	1	-	4	-	-	28	1	34	
0.0	0.0	0.0	2.9	0.0	11.8	0.0	0.0	82.4	2.9	100.0	

Ol: カン石, Opx, Cpx: 斜方、単斜輝石、BHb, GHb: 緑色・褐色角閃石、Opq: 不透明鉱物、

Cum: カミングトン閃石、Zr: シルコン、Bt: 黒雲母、Ap: アパタイト

火山ガラス形態分類

Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It	合計	色付gl	備 考
-	-	-	-	-	-	-	-	-	初生的にはpm型glを含むと判断されるが 現在著しく風化変質する。

H: 扁平、C: 中間型、T: 多孔質、It: 不規則型、incl: インクルージョン、devt: 失透化、RI: 屈折率

火山ガラス屈折率測定

屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測 定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
最小	最大				
-	-	-	-	-	測定対象外

鉱物の屈折率測定

屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測 定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	鉱物の種類 pl
最小	最大				
1.530	1.543	1.537	52	1.536	オリゴクレイス>アルバイト
1.546	1.548	1.547	2	-	アンデシソ

斜方輝石: 劈開片上での最大屈折率 $n_2 = \gamma$ 、角閃石 $n_2 (\beta < n_2 < \gamma)$ 、

斜長石: 劈開片上での最小屈折率 $n_1 (\alpha < n_1 < \beta)$

表8 胎土分析結果表(土サンプル)

分析試料名: 3. 土サンプル(21-5)

全 鉱 物 組 成

火山 ガラス	軽 鉱物	重 鉱物	岩片	そ 他	合計	備 考
3	146	19	32	-	200	火山gl: 珪長質bw>pm型。 軽鉱物: Qz, Kf>pl。 重鉱物: Bt, GHb, Opq主。Cum, Opx, Cpx, Zr含む。 岩片: 緑黄色で微結晶の集合体为主。その他: -。
1.5	73.0	9.5	16.0	0.0	100.0	

bw:バブルウォール, pm:軽石, sco.:スコリア, pl:斜長石, Qz:石英, Kf:カリ長石, chal:カルセドニー

重 鉱 物 分 析

Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bt	Ap	total	備 考
	Opx	Cpx	BHb	GHb							
-	1	1	-	18	12	2	1	165	-	200	Btは緑~緑黄色で赤褐色のものは含まず。 Epidote少量含む。
0.0	0.5	0.5	0.0	9.0	6.0	1.0	0.5	82.5	0.0	100.0	

Ol:カンラン石、Opx,Cpx:斜方、単斜輝石、BHb,GHb:緑色・褐色角閃石、Opq:不透明鉱物、

Cum:カンクトン閃石、Zr:ジルコン、Bt:黒雲母、Ap:アパタイト

火山ガラス形態分類

Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It	合計	色付gl	備 考
12	24	7	1	2	11	5	62	+	珪長質薄手bw型glを主とするが、やや厚手のものも含む。 It型はかなり古い時代のglか。
19.4	38.7	11.3	1.6	3.2	17.7	8.1	100.0		

H:扁平、C:中間型、T:多孔質、It:不規則型、incl:インクルージョン、devt:失透化、RI:屈折率

火山ガラス屈折率測定

屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測 定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
最小	最大				
1.4965	1.5024	1.4993	11	1.499	H,C, ←AT gl
1.5094	1.5134	1.5111	21	1.511	H,C, ←K-Ah gl

鉱物の屈折率測定

屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測 定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	鉱物の種類 pl
最小	最大				
1.529	1.544	1.536	50	1.530-1.531, 1.539	オリゴクレイス>アルバイト
1.547	1.558	1.551	5	-	アンデシソ〜ラブラドライト

斜方輝石: 劈開片上での最大屈折率 $n_2 \cong \gamma$ 、角閃石 $n_2 (\beta < n_2 < \gamma)$ 、

斜長石: 劈開片上での最小屈折率 $n_1 (\alpha < n_1 < \beta)$

表9 通過粒径頻度分布表

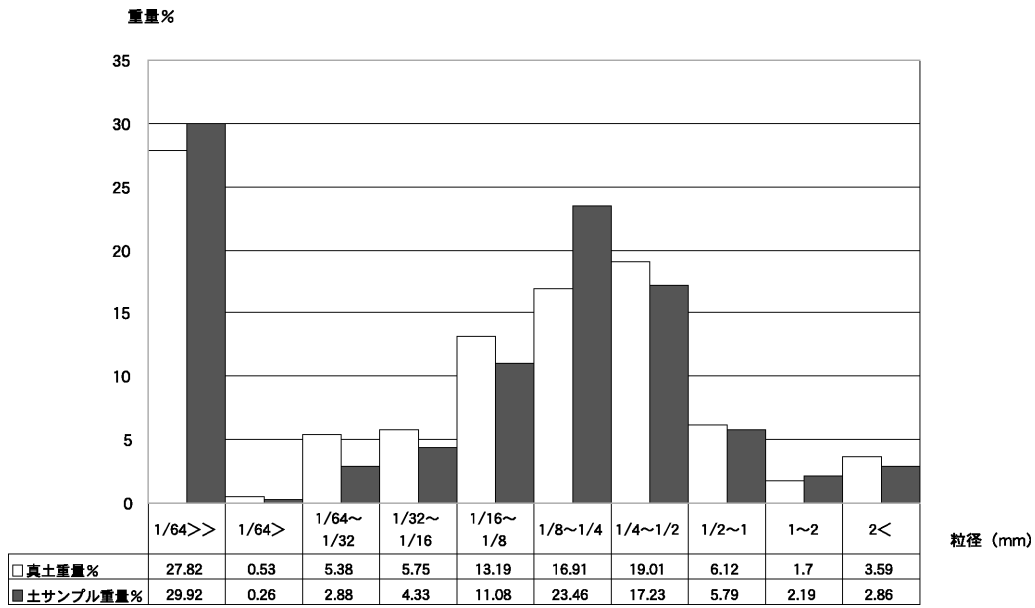
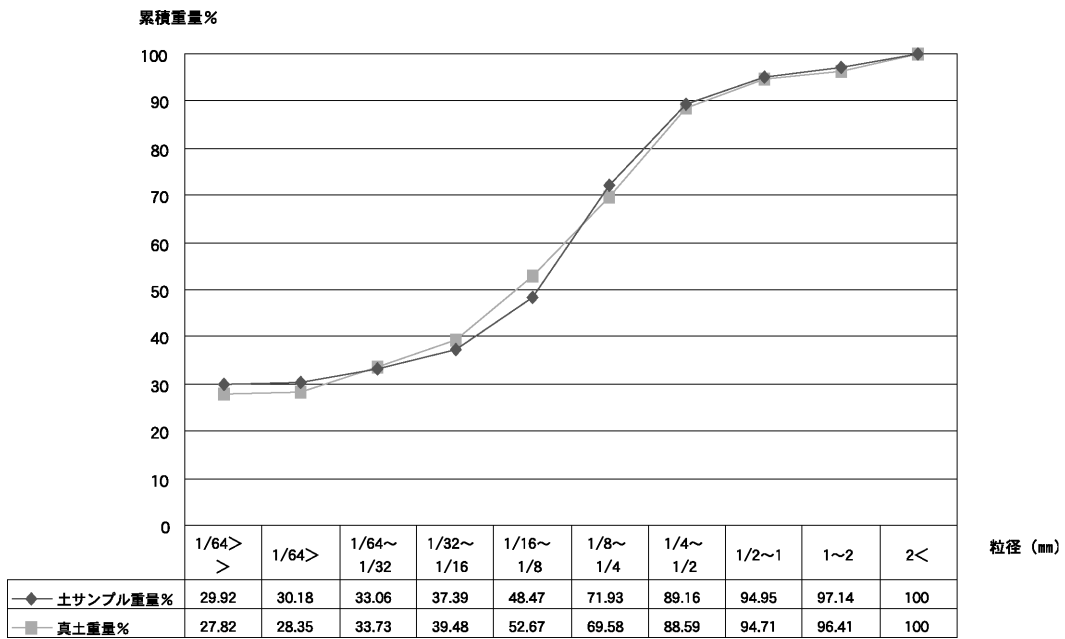


表10 通過粒径累積表



7. 鏡鑄造関連遺物 蛍光X線分析報告

はじめに

井戸130・土壌94から鏡の鑄型とともに銅滴・銅滓と坩堝・トリベ・鞆の羽口の破片や、その他鉄滓と思われる滓が出土した。鉄滓と思われる滓以外は、坩堝・トリベ・鞆の羽口の付着物も緑青色を呈していることから、おそらく銅の合金による鑄造に関連する遺物と想定された。したがって、その銅滴・銅滓成分を調べることにより鏡の原材料・銅の合金の種類が推定できる可能性があると考え、今回は蛍光X線装置による表面非破壊の面的および点的な分析を行った。

分析の条件とその結果

A：面的な分析

測定機器はHORIBA NASA500を用いた。機器の設定条件はX線管電圧15・50kV、電流240 μ A、測定時間600secで測定した。

試料としては銅滴・銅滓・鉄滓と思われるもの15個体を選別し、各試料ともに表・裏両面の測定を行った。

結果、今回の分析では銅 (Cu)・鉛 (Pb)・錫 (Sn)・鉄 (Fe) が検出され、15個の試料は下記の4種類に大別できた。なお各試料とも両面同様な傾向を示した。

- 1．銅 (Cu)・鉛 (Pb) を主成分とするもの (試料番号2～7・9)
- 2．銅 (Cu) を主成分とするもの (試料番号10～12)
- 3．銅 (Cu)・錫 (Sn)・鉛 (Pb) を主成分とするもの (試料番号1・8)
- 4．鉄 (Fe) を主とするもの (試料番号13～15)(銅・錫・鉛は含まれていず、1～3と明らかに違う)

1～3については、いずれも銅・錫・鉛のは検出されるが強度に違いがある。1は銭貨に似た成分構成、2は銅の単体に近い成分構成、3は青銅に近い成分構成、4は鉄滓である。

B：点的な分析

測定機器はセイコーインスツルメンツ (株) 製SEA5230を用いた。機器の設定条件はX線管電圧50kV、電流1000 μ A、測定時間300secで測定した。この分析は、(財)元興寺文化財研究所に御世話になりました。記して御礼申し上げます。

表11 分析試料一覧表 (試料番号1～15：A、16～20：B)

試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
種類	銅滴	銅滴	銅滴	銅滴	銅滴	銅滴	銅滓	銅滓	銅滴	銅滓
出土遺構	井戸130	井戸130	井戸130	井戸130	土壌94	土壌94	土壌94	土壌94	土壌94	井戸130
試料番号	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
種類	銅滴	銅滴	鉄滓	鉄滓	鉄滓	鑄型	鑄型	坩堝	羽口	銭貨
出土遺構	井戸130	井戸130	井戸130	井戸130	井戸130	井戸130	井戸130	土壌94	井戸130	土壌10

試料としては鑄型・坩堝・羽口に付着した銅滓と同じ調査区から出土した銭貨の計5個体を測定した。各試料とも位置を変えて2～3箇所測定をした。

この分析でもいずれも銅 (Cu)・鉛 (Pb)・錫 (Sn) が検出され、下記の3種類に大別できた。しかし試料番号20以外は試料の測定箇所によって強度の差が見られた。AとBの測定結果の相違は測定方法の点的であるか、面的であるという可能性がある。

1. 銅 (Cu) を主成分とする (試料番号16・17)
2. 銅 (Cu)・鉛 (Pb)・錫 (Sn) を主成分とする (試料番号18・19)
3. 銅 (Cu)・鉛 (Pb) を主成分とする (試料番号20)

1は銅の単体に近い成分構成、2は青銅に近い成分構成、3はいわゆる銭貨の成分構成であった。

小結

この内、銅を含むものA 1～3・B 1～2の相違が、製造される製品の原料の差なのか、成分の偏在を表わしているのか、または埋蔵環境のなかでの劣化によるものかは不明である。また銅滓・鉄滓両方の金属滓が出土していることから、周辺で銅製品だけでなく鉄製品も作られていたと考える事もできるが、今回は炉跡等の鑄造関連の遺構は検出されず、出土したのは鏡の鑄型だけであることを考慮すると即断はできない。周辺の調査では炉跡と共に銅滓・鉄滓や鑄造に伴う鑄型が出土しており、周辺を含めた分析を行うことで鉄・銅製品の種類やそれを製作する技術的手法を解明する道が開ける可能性がある。今回の分析は劣化を伴う遺物表面の成分分析であり、結論はX線回折、金属部位を確認するための断面観察試料を作成するEPMA分析、定量分析ができるICP分析などの今後の詳細な分析に委ねたい。

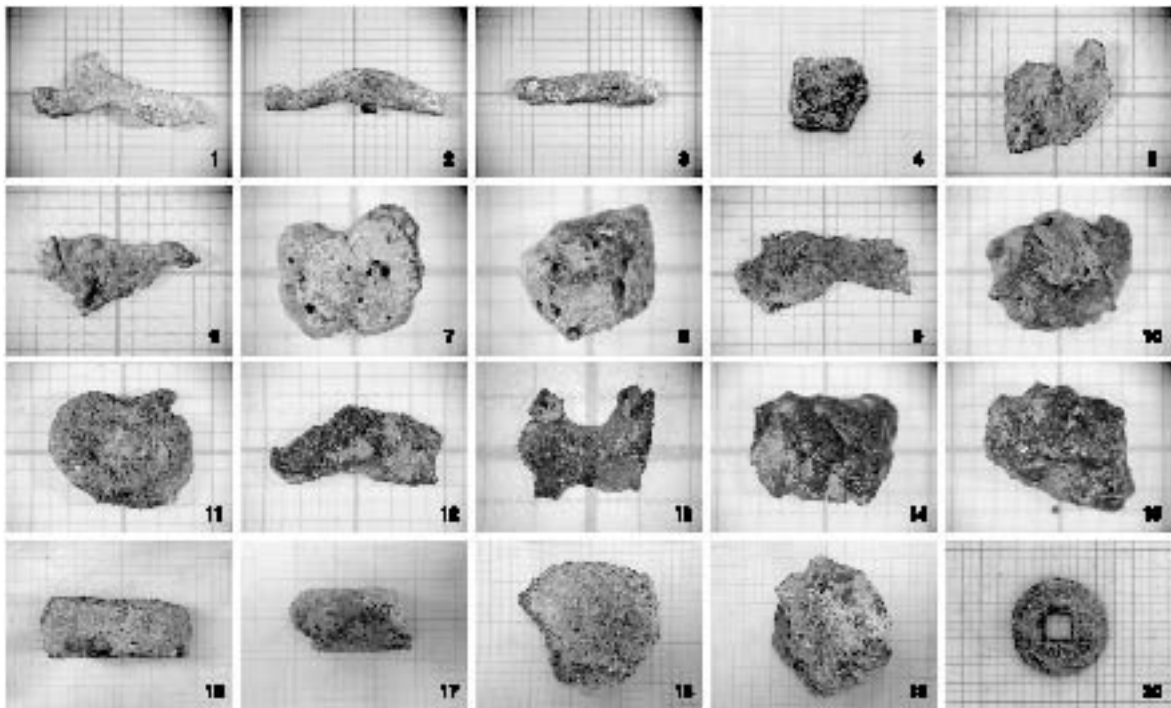


図24 分析試料 (試料番号1～15: A、16～20: B)

表12 面的な分析 蛍光X線スペクトル

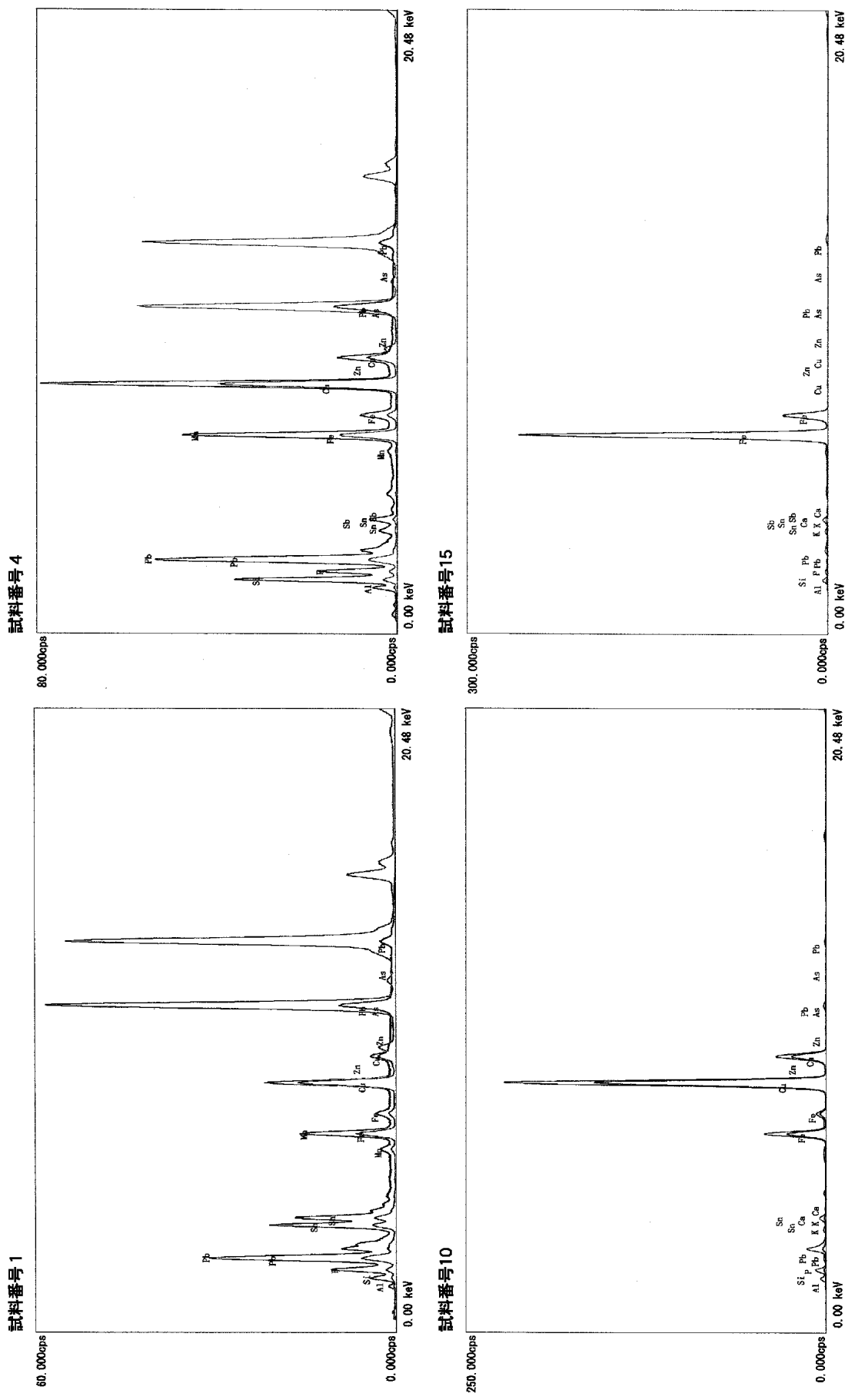
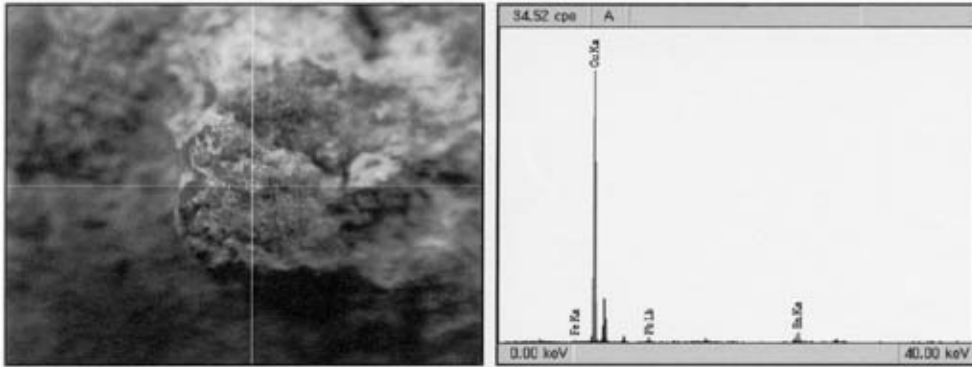
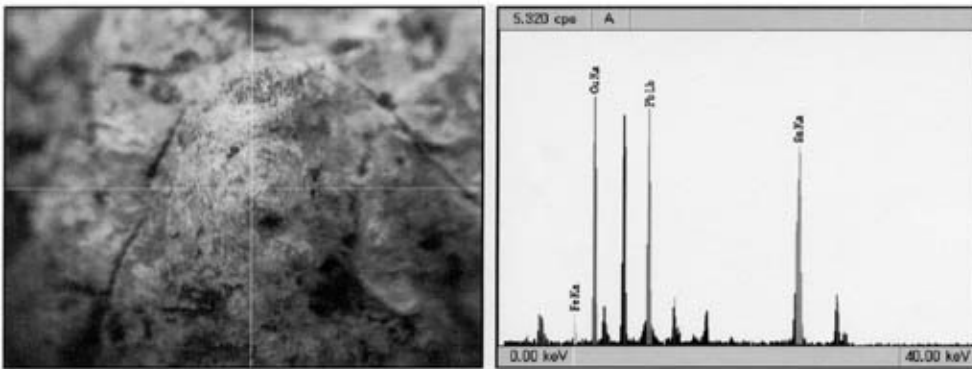


表13 点的な分析 試料像・蛍光X線スペクトル

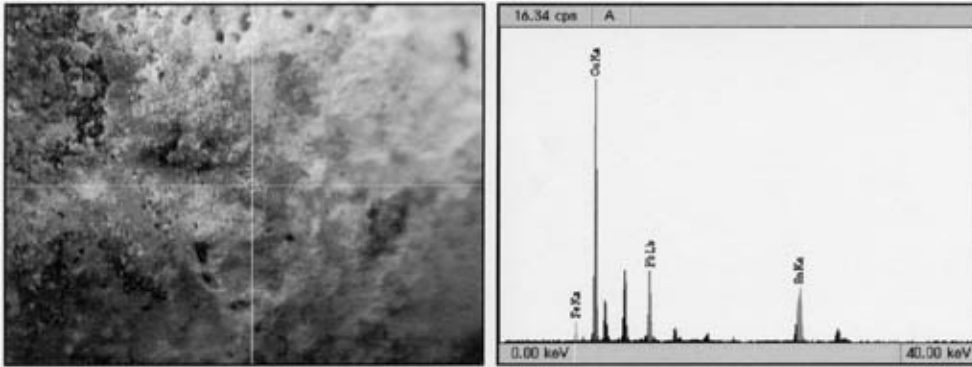
試料番号17



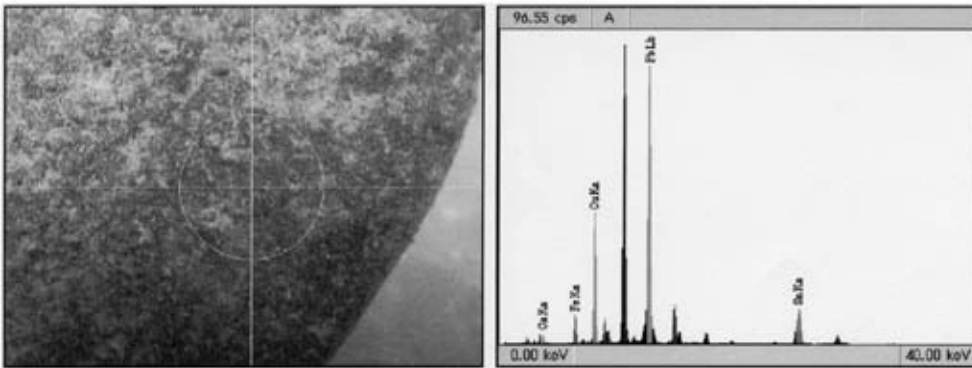
試料番号18



試料番号19



試料番号20



左: [試料像] 視野: [X Y] 6.60 4.95 (mm) 右: [スペクトル]

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうはちじょうさんぼうさんちょうあと							
書名	平安京左京八条三坊三町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2005-10							
編著者名	東 洋一・布川豊治							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2005年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 はちじょうさんぼう 八条三坊 さんちょうあと 三町跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 あぶらのこうじどり 油小路通 しおこうじさがる 塩小路下る ひがししおこうじちょう 東塩小路町 ちない 地内	26100		34度 58分 58秒	135度 45分 31秒	2005年7月 28日～2005 年9月26日	165m ²	ビル計画
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京 八条三坊 三町跡	都城跡	古墳時代以前		石器				
		古墳時代		土師器、須恵器				
		平安時代	流路236、柱穴など	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、石帯				
		鎌倉時代前半	L字形溝116、井戸5、柱穴など	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入磁器、滑石製品				
		鎌倉時代後半	土壇1・10・94、井戸130、柱穴など	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入磁器、滑石製品、鑄造関係遺物				
		江戸時代	耕作土層					
		近代	転車台	煉瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-10

平安京左京八条三坊三町跡

発行日 2005年12月28日

編集
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961